はじめに

本講座は、国公立二次試験の問題を中心に扱った講座です。
国公立の二次試験は、記述中心で構成されています。
●重要語の読み（副詞が多い）や意味
●書き下し文（「すべて平仮名で」という指定が多い）
●現代語訳
●理由・解釈などの説明問題
などが出題されます。最後に本文全体に関わる問題を出されることも多く、傍線部だけではなく本文全体をきちんと読み込み、全文の主旨を把握することが必要です。よって、この講座を受講する前に、「高１・高２ベーシックレベル漢文」か「高１・２・３漢文」のどちらかを既に受講し、それらの内容はすべてわかっていることを前提とします。

本講座では、スタンダードであまり扱えなかった「漢文常識」や「文学史」にも触れます。たとえば「老子」という名前を聞けば、どういう思想の人かすぐに思い浮かびますか？「諫言」とはどういうことか、そうすることによってどうなる危険があるか、わかりますか？このような背景知識があるかないかで、得点も変わってくることでしょう。より正しく早く読み解くためには、句法だけではなく、このような漢文常識も必要です。これらの知識を得て、記述式の入試問題に対応できる力をつけましょう！

予復習・授業の受け方について

全ての講において、動画を見る前に該当講の予習をしてください。講によっては、途中に〈講義動画中に使用します〉というページがありますが、そこは予習不要です。大問（一、もしくは一、二の二つ）のみ予習をしてください。

記述問題になると、最初は何を書いていいかわからず、白紙にしてしまう人が多いのですが、「自分で書く」ということをしないと記述力は養えません。間違ってもかまいません。拙い日本語だろうがそんなことは気にしなくていいです。さらに、最初は制限時間なんて気にせず、どれだけかかってもかまいませんので、「自分が納得できるまで解ききること」を、まずは実践してください。

予習が終われば、なるべく時間をあけずに該当講の動画を見てください。時間が経ってしまうと、せっかく予習をしたのに、どうしてその解答にしたのか忘れてしまうので、覚えている間に見ることが重要です。

講義を見終えたら、復習を必ずしましょう。みなさんのレベルだと、句法などは一通り身についていると思いますが、本講座で新しく得た知識や、たとえば書き下し文が記述問題になったときに、送り仮名（特に助詞）があやふやだったもの、接続を間違えて活用のさせ方が違っていたものなどがあれば、再度確認しておきましょう。

「復習問題」は、記述問題を主に出題していますので、本講座ではサイト上での「確認テスト」はありません。テキスト上での「復習問題」として取り組んでください。

目次

第一講　『百喩経』／『三国史記』……p. 4
第二講　『資治通鑑』／『史記』……p. 16
第三講　『潜研堂文集』／『東坡居士艾子雑説』……p. 26
第四講　『庸盦筆記』／「諸子百家・四書五経」……p. 34
第五講　『史記』／「儒家・道家・法家」……p. 44
第六講　『唐語林』／『荘子』……p. 54
第七講　『大唐新語』／『十八史略』……p. 63
第八講　『王文成公全書』「文録 一」／『論語』・『論語集註』・『論語古義』……p. 71
第九講　『晋書』／『冥報記』……p. 80
第十講　『白居易集』／『小雪日、香亭弟贈灰鼠裘』・『礼記』／「詩人」……p. 92
第十一講　『清波雑志』／文学史(1)……p. 103
第十二講　『東坡全集』「范文正公集序」／文学史(2)……p. 110

第一講　『百喩経』／『三国史記』

一　次の文章を読んで、**問一**～**五**に答えなさい（設問の都合で、返り点・送り仮名を省略した部分がある）。

昔有夫婦、有三番餅。夫婦共分、各食一餅。余一番在、共作①要言。②若有語者、要不与餅。既作要已。為一餅故各不敢語。須臾有賊、入家偸盗取其財物。一切所有尽畢賊手。夫婦二人以先要、故眼看不語。賊見不語、即其夫前③将略取其婦。其夫眼見、亦復不語。婦便④喚賊。婦語其夫言。云、「⑤何癡人、為一餅故見賊不喚。」其夫拍手笑言。「我定得餅、⑥不復与爾。」世人聞之無不嗤笑。凡夫之人亦復如是。為小名利故詐現静黙、⑦為虚仮煩悩種種悪賊之所侵略。

（『百喩経』より）

〔注〕
○要言——約束、誓い。
○癡人——愚かな人。
○嗤笑——あざけり笑うこと。
○虚仮——うそ、いつわり。

問一　傍線部①「要言」とあるが、その内容を具体的に説明しなさい。

問二　傍線部②「若」、傍線部③「将」、傍線部④「便」の読みを、送り仮名も含めてすべて平仮名で記しなさい（現代仮名遣いでよい）。

②＝

③＝

④＝

問三　傍線部⑤「何癡人、為一餅故見賊不喚」、⑥「不復与爾」を、それぞれ現代語に訳しなさい。

⑤＝

⑥＝

問四　傍線部⑦「為虚仮煩悩種種悪賊之所侵略」を、すべて平仮名で書き下しなさい（現代仮名遣いでよい）。

問五　二重傍線部「凡夫之人」とはどのような存在なのか、本文をふまえて五〇字以内で説明しなさい。

〈講義動画中に使用します〉　＊ここは予習不要（二は要予習）。

「故」

【名詞】「　　　」…理由・原因

「　　　」…❶事件・事故・できごと　❷故事　❸なじみ　❹たくらみ

【接続詞】「　　　」…だから

【副詞】「　　　」…❶わざと　❷わざわざ・特に

「　　　」…❶本来　❷依然として　❸必ず　❹常日ごろ　❺かえって

【形容詞】「　　　」…もとの

【動詞】「ふル」…❶死ぬ　❷衰える

＊
如レ故
若レ故
猶レ故
＝「　　　　　　」

「不復Ｖ」

❶「　　　　　　　　」

＊「復」の否定

（例）不二復タ与ともニ言一ハ。〔復た与に言はず。〕

（　　　　ともに話をしなかった。）

❷「　　　　　　　　」

＊「不」を強めている

（例）黄鶴一タビ去ツテ不二復タ返一ラ。〔黄鶴一たび去つて復た返らず。〕

（黄鶴は一たび去って　　　　帰って来ない。）

二　次の文章を読んで後の設問に答えよ。ただし、設問の都合で送り仮名を省いたところがある。

温達、高句麗平岡王時人也。破衫弊履、往来於市井間。時人目之為愚温達。平岡王少女児好啼。王戯曰、「汝常啼聒我耳、当帰之愚温達」。王毎言之。及女年二八、王欲下嫁於高氏。公主対曰、「大王常語汝必為温達之婦。今何故改前言乎。<u>a 匹夫猶不欲食言、況至尊乎</u>。故曰『王者無戯言』。今大王之命謬矣。妾不敢祗承」。王怒曰、「<u>b 宜従汝所適矣</u>」。於是公主出宮独行、至温達之家。見盲老母、拝問其子所在。老母対曰、「惟我息不忍飢、取楡皮於山林。久而未還」。公主出行至山下、見温達負楡皮而来。<u>c 公主与之言懐</u>。温達悖然曰、「此非幼女子所宜行、必非人也」。遂行不顧。公主明朝更入、与母子備言之。温達依違未決。其母曰、「<u>d 吾息至陋、不足為</u>

貴人匹〔一〕。吾家至〔ツテ〕窶〔まずシク〕、固〔ヨリ〕不〔レ〕宜〔シカラ〕〔二〕貴人〔ノ〕居〔ニ〕〔一〕。公主対〔ヘテ〕曰〔ク〕、「古人言〔フ〕『一斗〔ノ〕粟猶〔ホ〕可〔ク〕〔レ〕舂〔つク〕、一尺〔ノ〕布猶〔ホ〕可〔シ〕〔レ〕縫〔フ〕』、則〔チ〕e苟〔クモ〕為〔レバ〕〔二〕同心〔一〕、何〔ゾ〕必〔ズシモ〕富貴〔ニシテ〕然〔ル〕後〔ニ〕可〔ケン〕〔レ〕共〔ニス〕乎〔ト〕」。乃〔チ〕売〔リテ〕〔二〕金釧〔せん〕〔ヲ〕〔一〕、買〔二〕‐得〔ス〕田宅牛馬器物〔ヲ〕〔一〕。

（『三国史記』による）

〔注〕
○温達――**?**～五九〇年。後に高句麗の将軍となる。
○平岡王――別名、平原王。高句麗第二十五代の王。在位は五五九～五九〇年。　○破衫――破れた上着。
○公主――王の娘。　○楡皮――ニレの樹皮。　○悖然――怒って急に顔色を変えるさま。
○依違――ぐずぐずすること。　○一斗粟猶可舂、一尺布猶可縫――出典は『史記』淮南衡山列伝。
○釧――うでわ。

問一　「匹夫猶不〔レ〕欲〔二〕食言〔一〕、況至尊乎」（傍線部ａ）を平易な現代語に訳せ。

問二　「宜レ従二汝所レ適矣」（傍線部ｂ）とはどういうことか、簡潔に説明せよ。

問三　「公主与レ之言レ懐」（傍線部ｃ）とはどういうことか、具体的に説明せよ。

問四　「吾息至陋、不レ足レ為二貴人匹一」（傍線部ｄ）を平易な現代語に訳せ。

問五　「苟為二同心一、何必富貴然後可レ共乎」（傍線部ｅ）とはどういうことか、わかりやすく説明せよ。

〈講義動画中に使用します〉　＊ここは予習不要

「所」

❶　（Aノ）所レVスル　〔（Aの）Vする所〕　（（Aが）Vすること・ひと・もの・場所・理由）

＊下のVを名詞化する働き

（例）　天所授也。　〔天の授くる所なり。〕

（天が授けたこと（人・もの）だ。）

❷　Aノ所レVスルノN　〔AのVする所のN〕　（AがVするN）

＊N（名詞）を修飾する働き

（例）　問二其所レ知長者一。　〔其の知る所の長者に問ふ。〕

（彼の知り合いの長者に尋ねた。）

前置詞の「与（＝與）」　＊与レN

❶「Nと」／「Nトともニ」

❷「Nノためニ」…〜のために・〜に対して・〜に　〈動作の目的〉

（例）吾与レ子出レ兵矣。〔吾子の与（ため）に兵を出（いだ）さん。〕（私はあなたのために軍隊を出そう。）

❸「Nヲもっテ」…〜を・〜でもって　〈動作の対象〉

（例）与レ汝為レ賓也。〔汝を与（もっ）て賓と為す。〕（お前を随行員とする。）

と↓「読み」の問題として一番頻出。下から返る。
あたフ
くみス（味方する・賛成する）
あづかル（関係する）
ともニス
ともニ（一緒に）
よリハ
か・かな↑〜与。（＝文末）
ためニ

再読文字以外の用法の「宜」

【形容動詞】「　　　　　　」…もっともだ

【形容詞】「　　　　　　」…妥当である様子

【名詞】「ぎ」…正当な道理・適切なあり方

【副詞】「ほとんド」…おそらく

復習問題　第一講

①　「若必ズ禁ジテ其レ不レバ(レ)変ゼ、…」の傍線部（接続詞）の読みを送り仮名も含めて平仮名で示せ。

②　「樹即チ応ヘテ(レ)声ニ、青翠如(レ)故。」の傍線部の読みを送り仮名も含めて平仮名で示せ。

③　「宜速出。」を次のように書き下した場合、空欄［Ａ］・［Ｂ］にはどのような語句が入るか、それぞれ平仮名で記せ。

［Ａ］すみやかに［Ｂ］

Ａ＝　　　　　Ｂ＝

④　「無(レ)所(レ)可(レ)用。」を平仮名で書き下し文にせよ。

⑤　「始メテ知(レ)ル為リシヲ(二)人情ノ所(レ)ト患フル。」を、現代語訳せよ。

第二講　『資治通鑑』／『史記』

一　次の文章は、唐の太宗と長孫皇后についての逸話である。これを読んで、後の設問に答えよ。ただし、設問の都合で返り点および送り仮名を省いたところがある。

長楽公主将出降。上以公主皇后所生、特愛之、勅有司資送倍於永嘉長公主。魏徴諫曰、「昔漢明帝欲封皇子曰、『我子豈得与先帝子比』。皆令半楚・淮陽。今資送公主倍於長主、a得無異於明帝之意乎」。上然其言、入告皇后。后嘆曰、「妾亟聞陛下称重魏徴、不知其故。b今観其引礼義以抑人主之情、乃知真社稷之臣也。妾与陛下結髪為夫婦、曲承恩礼、毎言必先候顔色、不敢軽犯威厳。c況以人臣之疎遠、乃能抗言如是。陛下不可不従」。因請遣中使齎銭絹以賜徴。

上嘗罷朝、怒曰、「d会須殺此田舎翁」。后問為誰。上曰、「魏徴毎

廷辱(はづかしムト)レ我(ヲ)」。后退(キテ)、具(ヘテ)二朝服(ヲ)一立(ツ)二于庭(ニ)一。上驚(キテ)問(フ)二其(ノ)故(ヲ)一。后曰(ク)、「妾聞(クナラク)主明(ナレバ)臣直(ナリト)。今魏徴(ノ)直(ナルハ)、由(ル)二陛下之明(ナルニ)一故也。<u>妾敢不賀</u>(e)」。上乃(チ)悦(ブ)。

（『資治通鑑』による）

〔注〕○長楽公主――太宗李世民（在位六二六～六四九）の娘。　○出降――降嫁すること。
○有司――官吏、役人。　○資送――送別のとき金銭や財貨を与えること。
○永嘉長公主――高祖李淵（在位六一八～六二六）の娘。　○魏徴――唐初の政治家（五八〇～六四三）。
○楚・淮陽――楚王劉英と淮陽王劉延のこと。いずれも後漢の光武帝の子、明帝の異母兄弟。
○結髪――結婚すること。　○中使――天子が派遣した使者。
○朝服――儀式の際に身につける礼服。

問一　「得レ無レ異二於明帝之意一乎」（傍線部ａ）を、明帝の意が明らかになるように平易な現代語に訳せ。

問二　「今観下其引二礼義一以抑中人主之情上、乃知二真社稷之臣一也」（傍線部ｂ）を平易な現代語に訳せ。

問三　「況以二人臣之疎遠一、乃能抗言如レ是」（傍線部ｃ）を平易な現代語に訳せ。

問四　太宗が怒って「会須レ殺二此田舎翁一」（傍線部ｄ）と言ったのはなぜか、簡潔に説明せよ。

問五　長孫皇后はどのようなことについて「妾敢不賀」（傍線部ｅ）と言ったのか、簡潔に説明せよ。

〈講義動画中に使用します〉

五常（普遍的な倫理道徳）

「　　」…普遍的な深い人間愛・他者への思いやり。
＊「忠・恕」…真心・思いやり

「　　」…人の行うべき正しい道・正義。

「　　」…秩序・社会生活のルール・礼法。

「　　」…道徳的分別。

「　　」…人を欺かない誠実さ。

五倫（特定の人間関係〔父子・君臣・夫婦・長幼・朋友〕における道徳）

『孟子』より

「父子親有り、君臣義有り、夫婦別有り、長幼序有り、朋友信有り」

二　次の文章をよく読んで、後の設問に答えよ。

秦攻レ趙。斉楚救レ之。秦計曰、「斉楚救レ趙。親則退レ兵。不レ親遂攻レ之」。趙無レ食。請二粟(注1)於斉一。斉不レ聴。周子(注2)曰、「Ⓐ不レ如三聴レ之以退二秦兵一。不レ聴則秦兵不レ郤。是秦之計中、而斉楚之計過也。且趙之於二斉楚一、扞蔽(注3)也。①猶二歯之有一レ脣也。脣亡則歯寒。今日亡レ趙、明日患及二斉楚一。且救レ趙之務、宜レ若下奉二漏甕(注4)一沃中焦釜(注5)上也。夫救レ趙高義也。郤二秦兵一顕名也。義救二亡国一、威郤二彊(注6)秦之兵一。不レ務レ為レ此、而務レ愛レ粟、為二国計一者過矣」。

（『史記』より）

〔注〕
1　粟（ぞく）――穀物の総称。
2　周子曰（しうしいはク）――周子は斉国の臣下。以下の周子の発言は斉王に対してなされたものである。
3　捍蔽（かんぺい）――みずからの身をおおい、敵から守るための防備。
4　漏甕（ろうをう）――水が漏れるかめ。
5　焦釜（せうふ）――焦げつくかま。
6　彊（きやう）――強に同じ。

問一　傍線部①について、
（ア）　書き下し文にせよ。
（イ）　ⓐ「歯」ⓑ「脣（くちびる）」は、それぞれ何のたとえとして使われているか、本文中の語で答えよ。

ⓐ＝　　　　ⓑ＝

問二　傍線部Ⓐについて、

（ア）「之」の指す内容を明らかにしながら、わかりやすく現代語訳せよ。

（イ）周子は、この対応により、斉国はどのような評価が得られると説いているか、わかりやすく説明せよ。

〈講義動画中に使用します〉

「於」

❶「於」がVの下→置き字

SV二於C一

SV二O於C一

❷「於」がVの前→直後のNから返読する

S於レNV　〔SNに於(おい)てV〕

「～はNに於(おい)て・～のNに於(お)ける」＝「Nにとって・Nに対して・Nに対する関係は・Nによって・Nで・Nから」

（例）呉王ハ於テレ朕ニ兄也。　〔呉王は朕に於て兄なり。〕（呉王は　　　兄である。）

（例）吾於ケルレ人ニ也、聴キテ二其ノ言ヲ一而信ゼリ二其ノ行ヒヲ一。　〔吾人に於けるや、其の言を聴きて其の行ひを信ぜり。〕

（私は　　　、その言葉を聞いてその行いを信じた。）

（例）北条氏之於ケルハ二源氏ニ一、則チ藤原氏之於ケル二平家ニ一也。

〔北条氏の源氏に於けるは、則ち藤原氏の平家に於けるなり。〕

（北条氏の源氏に対する関係は、藤原氏の平家に対する関係（と同じ）だ。）

「戦国の七雄」…秦・斉・楚・趙・燕・魏・韓

復習問題　第二講

①「[A]君前途尚(ホ)可(ナルヲヤ)。」の空欄[A]にあてはまる文字として最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

ア　猶　　イ　当　　ウ　応　　エ　況　　オ　将

②「大恩難報不如殺之。」の書き下し文として最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

ア　大恩は報い難く、之を殺すが如(ごと)くせず
イ　大恩は難く、報いるに之を殺すが如くせず
ウ　大恩は報い難く、之を殺すに如かず
エ　大恩は報いて之を殺すが如くせざること難し
オ　大恩は難く、報いるに之を殺すに如かず

③「斉(ノ)荘公出(デテ)猟(ス)。有(リ)二一虫一。挙(ゲ)レ足(ヲ)将撃其輪。」の傍線部を平仮名で書き下し文にせよ。

注　虫…ここでは「かまきり」。

④「請粟於斉。」を書き下し文にせよ。

⑤　「趙之於斉楚、捍蔽（かんぺい）也。」の傍線部を現代語訳せよ。

注　捍蔽…みずからの身をおおい、敵から守るための防備。

第三講　『潜研堂文集』／『東坡居士艾子雑説』

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ（設問の都合で、送り仮名を省いたところがある）。

古有儒（注1）・釈・道三教、自明以来、又多一教曰小説。小説（注2）演義之書、①未嘗自以為教也。而士大夫・農・工・商賈（注3）無不習聞之、以至児童・婦女・不識字者、亦皆聞而如見之。②是其教較之儒・釈・道而更広也。釈・道猶勧人以善、③小説専導人以悪。姦邪淫盗之事、儒・釈・道書所不忍斥（注4）言者、彼必尽相窮形、津津（注5）楽道、以殺人為好漢、以漁色為風流、喪心病狂、無所忌憚。子弟（注6）之逸居（注7）無教者多矣、又有此等書以誘之、④曷怪其近於禽獣乎。世人習而不察、⑤輒怪刑獄之日繁、盗賊之日熾、豈知小説之中於人心風俗者、已非一朝一夕之故也。

（銭大昕『潜研堂文集』）

〔注〕
1　儒・釈・道三教――儒教・仏教・道教の三つの教え。
2　小説演義――小説の一形式。歴史事実に脚色を加え、口語を交えて著したもの。　3　商賈――商人。
4　斥言――はっきりと言う。　5　津津楽道――悦んで口に出す。　6　子弟――若者。
7　逸居――気ままに暮らす。

問一　傍線部①をすべて平仮名で書き下せ。

問二　傍線部②は、どういうことを、何を根拠に言っているか。具体的に説明せよ。

問三　傍線部③の具体的な内容を言っている部分を文章中より抜き出し、その始めと終わりの五字をそれぞれ書け。ただし句読点や送り仮名は含まない。

始め…

終わり…

問四　傍線部④を、「其」が指す内容を明示して、わかりやすく口語訳せよ。

問五　傍線部⑤で、刑事事件や強盗事件がますます増える現状に、世の人々がその理由を考えあぐねているとされるが、ではその理由はどこにあるのか。文章内容に即してわかりやすく説明せよ。

〈講義動画中に使用します〉

「者」…語や句の下に付く。

上の語や句の内容によって、「人・こと・時・場所・方法・理由・状態」などの意味になる。
訓読は「モノ・コト・ハ・トコロ」や、読まない場合もある。

（例）受人施**者**、常畏人。　〔人の施しを受くる**者**は、常に人を畏る。〕
（人の施しを受ける**者**は、いつも人を畏れるようになる。）

（例）至於不敢加兵**者**終其身。　〔敢へて兵を加へざる**者**其の身を終ふるに至る。〕
（おもいきって攻撃を加えようとしないままで〔＝**状態**で〕一生を終えてしまった。）

（例）頭戴冠**者**文也。　〔頭冠を戴く**は**文なり。〕
（頭に冠を載せている**こと**は文〔＝学問〕の証です。）

（例）此非孟徳之困於周郎**者**乎。　〔此れ孟徳の周郎に困しめられし**者**に非ずや。〕
注　周郎…呉の周瑜
（ここは孟徳が周瑜に苦しめられた**場所**ではなかったか。）

（例）誠**者**天之道也。　〔誠は天の道なり。〕
（誠**は**天が定めたこの世に行われるべき道である。）

＊「時」に関する字について意味を強める働きをする。
（例）今者・昔者・古者・向者　など

二

次の文章を読んで設問に答えよ。なお、設問の都合で送り仮名を省いたところがある。

斉宣王時、人有死而生、A能言陰府間言。B乃云。

C方在陰府時、見閻羅王詰責一貴人曰、D「汝何得罪之多也。」因問曰、「何人也。」曰、「魯正卿季氏也。」其貴人再三不服曰、「無罪。」閻王曰、「某年斉人侵境、汝只遣万人往応之。皆曰、E多寡不敵、必無功、豈徒無功、必枉害人之命。汝復而不従。F是以斉兵衆、万人皆死。又某年某日饑、G汝蔽君之聡明而不言。遂不発廩、因此死数万人。又汝為人相、職在燮理陰陽、汝為政乖戻、多致水旱之歳、民被其害。此皆汝之罪也。」其貴人叩頭乃服。王曰、「可付阿鼻獄。」乃有牛頭人数輩執之而去。

艾子聞之、太息不已。門人問曰、「先生与季氏有旧耶。何嘆也。」

艾子曰ク、「我ハ非ザルナリレ歎クニ二季氏ヲ一也。蓋シ歎クナリト二閻羅王ヲ一也。」門人曰ク、「何謂也。」曰ク、

「（H）自リレ此レ安ンゾ得ンヤ二獄ノ空ナルヲ一耶。」

（『東坡居士艾子雑説』）

〔注〕陰府――あの世。　閻羅王――閻魔大王。　詰責――詰問すること。　魯正卿季氏――魯国の大臣の季氏。
枉害――むりやりにそこなうこと。　発廩――穀物倉庫を開くこと。　燮理――秩序をととのえること。
乖戻――あるべき道にもとること。　阿鼻獄――最も苦しい地獄。　有旧――旧交があること。

問一　傍線部Ａ「能」・Ｂ「乃」・Ｃ「方」・Ｆ「是以」の読みを、送り仮名も含めて記せ。

Ａ＝　　　　Ｂ＝

Ｃ＝　　　　Ｆ＝

問二　傍線部Ｄ「汝何得罪之多也」を平仮名のみで書き下せ。

（例）　学而時習之→まなびてときにこれをならふ

問三　傍線部Ｅ「多寡不敵、必無功」・Ｇ「汝蔽君之聡明而不言」を現代語訳せよ。

Ｅ＝

Ｇ＝

問四　傍線部Ｈ「自此安得獄空耶」とあるが、艾子はどうしてそう言ったのか。七十五字以内で説明せよ。

復習問題　第三講

① 「今方来ラントス、欲スレ辱シメントレ之ヲ。」の傍線部の読みを、送り仮名も含めて平仮名で記せ。

② 「何謂也。」を訳せ。

③ 「是以不ニ敢当一也。」を、すべて平仮名で書き下し文にせよ。仮名遣いは問わない。

④ 「安有取人之駒(く)者乎。」の「安」は反語である。すべて平仮名で書き下し文にせよ。

⑤ 「人孰不レ楽ニ告以㆑善哉。」の「孰」は反語である。傍線部を平仮名で書き下し文にせよ。

第四講『庸盦筆記』／「諸子百家・四書五経」

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ

寧波、水国也。然甬江与海潮相呑吐、其水皆鹹。故ⓐ凡取淡水者、必溯鄞江。其源ⓑ乃清。居民則戸列巨甕、積受雨水而用之。余任寧紹台道五年、署中用水、①皆以船載之十里之外。府県署中亦然。丙戌之夏、②雷声殷殷、忽ⓒ将道署厨房外一水甕撃砕。其甕容水十余石、迸流満地。甕外有八九尺之蛇蛻一条。

余乃悟曰、「是甕之水、道署之人、飲食皆取給焉。蛇浴於甕、行至甕外而脱殻。其水必毒、可以殺人。③故驟撃之、天之愛人甚矣。淡水ⓓ固養人之物。蛇初入浴、人ⓔ尚未知。而④蒼蒼者早已知之、奮雷一撃、⑤使道署之人免遭其害。於乎、⑥何其仁与明之無不周也。」

（清・薛福成『庸盦筆記』による）

（備考）　この文には、設問の都合で送り仮名を省いたところがある。

（注）　寧波――地名。現在の浙江省にある。
甬江――寧波にある川の名。
呑吐――のんだり吐いたりする。川の水と海の水が混ざることをいう。
鄞江――甬江の上流にあたる支流の名。
寧紹台道――清朝の行政区画で、寧波・紹興・台州の三府をまとめて一道とした。
署中――役所の中。
丙戌之夏――一八八六年の夏。
殷殷――雷のとどろくさま。
十余石――石は容量の単位で、一升の百倍。
迸流――勢いよく流れ出る。
一条――条は細長いものを数える単位。
周――あまねし。広くゆきわたる。

問一　傍線部①「皆 以 船 載 之 十 里 之 外。」について、

（１）　書き下し文に改めよ。

（２）　わかりやすく解釈せよ。

問二　傍線部②「雷声殷殷」とあるが、そのあとどのような状況になったか、具体的に説明せよ。

問三　傍線部③「故縣擊之、天之愛人甚矣。」を、わかりやすく解釈せよ。

問四　傍線部④「蒼蒼者」とは何を指すか、文中の語を用いて記せ。

問五　傍線部⑤「使道署之人免遭其害。」を、書き下し文に改めよ。

問六　傍線部⑥「何其仁与明之無不周也。」について、筆者がこのように考えた理由を、本文の内容に即して百字以内で述べよ。

問七　波線部ⓐ「凡」、ⓑ「乃」、ⓒ「将」、ⓓ「固」、ⓔ「尚」の読み方を、送り仮名も含めて、すべて平仮名で記せ（現代仮名遣いでもよい）。

ⓐ＝　　ⓑ＝　　ⓒ＝

ⓓ＝　　ⓔ＝

問八　次の文章の空欄（　Ａ　）～（　Ｄ　）に最もふさわしいものを後の（ア）～（コ）から選べ。

仁は儒教の祖と称される孔子が説いた重要な徳目である。その思想を展開させた（　Ａ　）時代の孟子は、仁とともに（　Ｂ　）をあわせて主張し、政治の根本とした。儒教は以後の中国の政治・社会・文化に大きな影響を与えた。その主要な経典は五経と呼ばれ、（　Ｃ　）や（　Ｄ　）などがある。

（ア）戦国　（イ）前漢　（ウ）三国　（エ）論語　（オ）詩経
（カ）大学　（キ）礼記　（ク）忠　（ケ）義　（コ）孝

Ａ＝　　Ｂ＝　　Ｃ＝　　Ｄ＝

〈講義動画中に使用します〉

「相（あヒ）Ｖ（スル）」

❶「　　　Ｖする」（みなＶする）

（例）聞（キ）二里人（ノ）相慶（ベルヲ）一、…

〔里人（りじん）の相慶（よろこ）べるを聞き、…〕

（郷里の人々がみな喜んでいたと聞き、…）

❷（相手に・相手を）「　　　」

＊「相」はただの添え字

（例）明月来（リテ）相（ヒ）照（ラス）。

〔明月来りて相ひ照らす。〕

（明月が空に昇って（私を）照らしてくれる。）

再読文字以外の用法の「将」

【副詞】「はタ」…いったいどうして〜であろうか・まさか〜ではあるまい　〈反語を強める働き〉

【接続詞】「はタ」…❶A（乎）、将B（乎）。　〈Aか、はたBか。〉（Aか、それともBか。）〈選択の働き〉

❷将A将B。　〈はたAはたB。〉（かつA、かつB。）〈同時存在の働き〉

「と」…〜と。　〈並列の働き　＊「与」と同じ〉

（例）伴(ヒテ)二月(ト)将(とヲ)レ影…　〈月と影とを伴ひて…〉（月と影とをつれて…）

【前置詞】「もっテ」…❶〜によって　〈手段を示す働き〉

❷〜を　〈動作の対象〉

【動詞】「ひきヰル」…導く・統率する

「諸子百家」…春秋・戦国時代に、学派を形成して、各国の諸侯に政策を進言する思想家や学派のこと。

●**儒家**…「　　」が祖で、「　　」を最も重要と考える。「**修己治人**（＝まずは己を修めて、その後に人を治める）」が使命。「　　」や「　　」に受け継がれ、思想が展開されていく。

●**道家**…「　　」が祖で、「　　」（＝「人為」である知識や道徳などを排除して、自然の本性に従うべき）を主張し、儒家と対立。「　　」などに受け継がれる。「　　思想」ともいう。

●**法家**…管仲が祖で、法律や刑罰を重んじる思想。集大成したのが「　　」で、「**信賞必罰**（＝賞すべき者には必ず賞を与え、罰すべき者には必ず罰を与えるべき）」を唱える。

●**墨家**…墨子が祖で、「**兼愛**（＝博愛主義）」、「**非攻**（＝戦争否定）」、「**節用**（＝過度の音楽や葬儀などの無駄を省くこと）」を説く。

●陰陽家…世の中のあらゆる現象を、「陰」と「陽」にわける「陰陽五行説」で説明する。鄒衍（「騶衍」とも）が代表的。

●名家…「名（＝言葉）」と「実（＝実体）」の分析を行う。詭弁派とも言われる。公孫竜・恵施が代表的。

●**縦横家**…「　　」が**合従策**（＝秦以外の国で連合）、「　　」が**連衡策**（秦とそれ以外の国を連盟）を唱える。

●雑家…様々な思想を取捨選択して総合。呂不韋が代表的。

●農家…農業中心の政治論。許行（きょこう）が代表的。

●小説家…民間のうわさや出来事を収集。詳細不明。

●**兵家**…兵法・軍事に関する思想。兵家の書である『　　　　　』が有名。

「四書五経」

●「五経」＝『**詩経**』、『**書経**』、『**易経**（えききょう）』、『**礼記**（らいき）』、『**春秋**』。
儒教の経典。

●「四書」＝『**論語**』、『**大学**』、『**中庸**（ちゅうよう）』、『**孟子**』。
宋の時代の程（てい）兄弟が、五経に先だって読むべき儒学の教科書として挙げた四つの書。

復習問題　第四講

① 「凡吏タル二於土ニ一者、…。」の傍線部の読みを、送り仮名も含めて平仮名で記せ。

② 「民知リ二其ノ異ナルヲ一、乃許スレ之ヲ。」の傍線部の読みを、送り仮名も含めて平仮名で書け（現代仮名遣いでよい）。

③ 「学ブ者語リテ二其ノ大ヲ一、而忽ゆるがセニスルハ二其ノ小ヲ一、固不可也。」の傍線部を送り仮名も含めて平仮名で訓読せよ。

④ 「使画工図其形。」に、返り点を付けよ（送り仮名は付けないこと）。

使　画　工　図　其　形　。

⑤ 「門外車轍、何其深也。」の傍線部を現代語訳せよ。

⑥ 『淮南子』は、思想的には老子と同じ諸子百家の流派の一つに属するとされる。その流派は何か、次の中から一つ選べ。

ア　儒家　　イ　道家　　ウ　法家　　エ　墨家　　オ　縦横家　　カ　陰陽家

第五講『史記』／「儒家・道家・法家」

一　次の文を読んで、後の問いに答えよ。

扁鵲過斉、斉桓侯客之。入朝ⓐ見曰、「君有疾、在腠理。①不治将深。」桓侯曰、「寡人無疾。」扁鵲出。桓侯ⓑ謂左右曰、「②医之好利也、欲治不疾者為功。」後五日、扁鵲復見曰、「君有疾、在血脈。不治恐深。」桓侯曰、「寡人無疾。」扁鵲出。桓侯不悦。後五日、扁鵲復見曰、「君有疾、在腸胃間。不治将深。」桓侯不応。扁鵲出。桓侯不悦。後五日、扁鵲復見、望見桓侯而退走。③桓侯使人問其故。扁鵲曰、「疾之在腠理也、湯熨之所及也。在血脈、鍼石之所及也。其在腸胃、酒醪之所及也。其在骨髄、④雖司命、無奈之何。今在骨髄。⑤臣是以無請也。」後五日、桓侯体病。使人召扁鵲。扁鵲ⓒ已逃去。桓侯ⓓ遂死。使聖人予知微、ⓔ能使良医得早従事、則疾可癒、身可活也。⑥人之所病、病疾多。而

医之所(ハ)レ病(ム)、病(ム)二道(ノ)少(キヲ)一。

（『史記』扁鵲倉公列伝による）

（備考）　この文には、設問の都合で送り仮名を省いたところがある。

（注）　扁鵲――戦国時代に活躍した伝説の名医。

斉――戦国時代の列強の一。現在の山東省一帯を統治していた。

桓侯――斉国の君主。

朝――斉国の宮殿。

腠理――皮膚の下。

寡人――君主の一人称。

左右――君主に仕える側近たち。

為功――自分の手柄とする。

湯熨――飲み薬と湿布による治療。

鍼石――針による治療。

酒醪――薬用酒および薬用の発酵飲料による治療。

骨髄――骨の中を流れる髄液。

司命――人間の命をつかさどる神様。

微――病気の徴候。

従事――治療にあたる。

問一　傍線部①「不治将深。」について、

（１）書き下し文に改めよ。

（２）わかりやすく解釈せよ。

問二　傍線部②「医之好利也、欲治不疾者為功。」を、わかりやすく解釈せよ。

問三　傍線部③「桓侯使人問其故。」を、書き下し文に改めよ。

問四　傍線部④「雖司命、無奈之何。」を、すべて平仮名で書き下し文に改めよ（現代仮名遣いでもよい）。

問五　傍線部⑤「臣是以無請也。」は、どのような意味か。その理由も含めて具体的に八十字以内で説明せよ。

問六　傍線部⑥「人之所病、病疾多。而医之所病、病道少。」を、わかりやすく解釈せよ。

問七　波線部ⓐ「見」、ⓑ「謂」、ⓒ「已」、ⓓ「遂」、ⓔ「能」の読み方を、送り仮名も含めて、すべて平仮名で記せ（現代仮名遣いでもよい）。

ⓐ＝

ⓑ＝

ⓒ＝

ⓓ＝

ⓔ＝

問八　この文の教訓とする内容に最も近いことわざを次の（ア）～（カ）の中から一つ選べ。

（ア）良薬は口に苦し。　（イ）病治りて医師を忘る。　（ウ）酒は百薬の長。
（エ）病膏肓に入る。　（オ）恋の病に薬なし。　（カ）医者の不養生。

問九　次の文章の空欄（　Ａ　）～（　Ｄ　）に最もふさわしいものを、後の（ア）～（コ）から選べ。

扁鵲の伝記を収める『史記』は（　Ａ　）が著した歴史書であり、諸子百家と呼ばれる思想家たちの伝記も収める。諸子百家には、儒家に属する思想家である孔子や（　Ｂ　）がおり、（　Ｃ　）に属する思想家である（　Ｄ　）や荘子がいる。

（ア）諸葛亮　（イ）司馬遷　（ウ）陶淵明　（エ）老子　（オ）韓非
（カ）孟子　（キ）孫子　（ク）法家　（ケ）道家　（コ）墨家

Ａ＝　　　　Ｂ＝　　　　Ｃ＝　　　　Ｄ＝

〈講義動画中に使用します〉

「儒家」

【孔子】

・姓＝孔、名＝**丘**（きゅう）、字（あざな）＝**仲尼**（ちゅうじ）、出身＝魯。
・「聖人」と仰がれる。
・『詩経』、『書経』、『春秋』を編纂したといわれている。
・孔子と弟子たちの言行を記録されている**『論語』**は、孔子の死後、弟子たちが編集したもの。
・**五常**（**仁**、**義**、**礼**、**智**、**信**）を重んじており、「　　」を最も重要と考えた。
・為政者として身につけるべきは、**「仁」**と**「礼」**だと考えていた。
・**「徳治主義」**…徳がある人物が人民を治めるべきだという考え。**道徳**や**礼儀**で国の秩序を保つ。

【孟子】

・出身＝魯
・「亜聖」（＝聖人の次に立派な人物）と仰がれる。
・著書**『孟子』**（←「四書」の一つ）
・「　　説」（＝人間の本性は「　　」。仁・義・礼・智を身につければ、聖人や偉人になれる）を説く。
・「　　」と「　　」を重視。
・**「王道政治」**…為政者は武力ではなく、仁義・徳に基づいて治めるべきだという考え。
・**「四端の説」**…**「惻隠**（そくいん）**の心」**（＝人の不幸を黙って見ていられない心）、**「羞悪**（しゅうお）**の心」**（＝不善を憎む心）、**「辞譲**（じじょう）**の心」**（＝人に譲る心）、**「是非**（ぜひ）**の心」**（＝善悪を見きわめる心）が人間の本質で、それが**「仁」**、**「義」**、**「礼」**、**「智」**の糸口とする考え方。

・「**孟母三遷**（もうぼさんせん）」…孟子の母が、孟子の教育のために住居を三回変えて、最適な環境を求めて学問に導いた。

・「**孟母断機**（もうぼだんき）」…孟子が勉強を投げ出して帰宅したら、孟子の母は織っていた織物を断ち切って、学問を途中でやめることは、このように今までの努力を無駄にすることだと戒めた。

【荀子】

・出身＝趙

・著書『荀子』

・「　　説」（＝人間の本性は「　　」。善に導くためには、**学問**や**礼儀**が必要。）を説く。

・「　　」を重視。

・門下から**法家**の**韓非子**（かんぴし）や**李斯**（りし）が出る。

【道家】

【老子】

・著書『老子』（本人の作かどうか不明）

・「　　　」…「人為」である知識や道徳などを排除して、自然の本性に従うべきという考え。

【荘子】

・著書『荘子』（寓話が多い）

・「**万物斉同**（ばんぶつせいどう）」…あらゆるものの価値はすべて平等だという考え。

・老子の「無為自然」の思想も継承。

「法家」

【韓非子】

・若いころに荀子に学ぶ。
・商鞅（しょうおう）・申不害（しんふがい）たちの法家思想を研究。
・著書『韓非子』（秦の始皇帝が読んで感動。秦に招くために韓の国に攻撃をしかけ、韓非子は秦へ。秦の宰相の李斯が自分の地位を脅かされることを恐れ、韓非子を罠にはめて投獄し自殺させた。）
・「　　　　　」を唱える。
・**「法治主義」**…信賞必罰を基本とし、「法」に従うべきという考え。

復習問題　第五講

① 「斉ノ景公謂二子貢ニ一曰ク、…」の傍線部の読みを、送り仮名まで含めて平仮名で答えよ。現代仮名遣いでも構わない。

② 「能挙ゲ二方八尺ノ石ヲ一、投グルコトレ之ヲ数丈ナリ。」の傍線部の読みを平仮名で答えよ。送り仮名も付けて答えよ。

③ 次の本文中の傍線部は誰を指すか。後の中から一つ選べ。

越前侯光通（みつみち）之時ニ、有リ二西尾伝兵衛ナル者一。嘗テ饋おくルニ二食ヲ於君ノ前ニ一、光通見ル三食中ニ有ルヲ二汚物一。〈中略〉光通怒リテ曰ハク、「寡人ハ言ヘリ二唯ダ看ヨト一、…」。
〈中略〉蓋シ慮レルナラン三其ノ咎ノ及バンコトヲ二厨人ニ一也。

注　越前侯光通…福井藩第三代藩主、松平光通。
　　饋…食事を供すること。
　　厨人…料理人。

ア　将軍　　イ　光通　　ウ　伝兵衛　　エ　厨人

④ 「行車数両、将レ出二長夏門一。」の傍線部を漢字仮名混じり文で書き下せ（現代仮名遣いでよい）。

⑤「仲尼」とは、誰のことか答えよ。

⑥『史記』の著者として最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

ア　曾先之　　イ　陳寿　　ウ　司馬遷　　エ　陶潜　　オ　劉向

第六講　『唐語林』／『荘子』

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。（設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。）

姚梁公与崔監司在中書。梁公有子喪。在仮旬日、政事委積、処置皆不得。言于玄宗、玄宗曰、「朕以天下事本付姚崇、以卿坐鎮雅俗。」及梁公出、頃刻間決遣 a 尽畢。

時斉平陽為舎人、在旁見之。梁公 ①自以為能、頗有得色。乃問平陽曰、「余之為相、比何等人。」②斉未及対、梁公曰、「何如管晏。」曰、「③不可比管晏。管晏之作法、b 雖不及後、c 猶及其身。相公前所立法令施未竟、悉更之。以此不及。」梁公曰、「④然則竟如何。」曰、「相公可謂 ⑤救時之相也。」梁公投筆曰、「救時之相、豈易得乎。」

時斉平陽善知今事、高仲舒善知古事。姚作相、d 凡質疑問難、皆

此ノ二人ナリ。因リテ嘆ジテ曰ハク、「欲セバレ知ラント二古事ヲ一、問ヒ二高仲舒ニ一、欲セバレ知ラント二今事ヲ一、問フ二斉澣ニ一。即チ無シトレ敗ルレ政ヲ矣。」

（『唐語林』による）

注　梁公――姚崇（えうすう）。唐・玄宗の時代の宰相。　崔監司――崔琳（さいりん）。　中書――中書省。皇帝の詔勅などを起草する役所。
子喪――息子の葬儀。　在仮――休暇中であること。
玄宗――唐の第六代皇帝。　卿――ここでは玄宗に告げた人物を指す。
坐鎮雅俗――ただ座って何もせず、名声や徳望によって上下の人心を従わせる。
頃刻間――わずかの間。　斉平陽――斉澣（せいくわん）。姚梁公の部下。
舎人――中書舎人。中書省の属官。　得色――得意のさま。　相――宰相。　何等――どのような。
管晏――管仲と晏嬰。ともに春秋時代の斉の名宰相。　其身――彼ら自身が宰相であった時、在職中の意。
相公――ここでは姚梁公を指す。　入相――朝廷に入って宰相となる。　投筆――筆を投げる。ここでは喜びを示す動作。
高仲舒――斉平陽と同時期の中書舎人。

問一　二重傍線部a「尽」、b「雖」、c「猶」、d「凡」は、それぞれ文中ではどのように読むか。その読み方を送り仮名も含めてすべて平仮名で記せ（現代仮名遣いでもよい）。

a＝

b＝

c＝

d＝

問二　傍線部①「自以為能」とあるが、「姚梁公」が「能」であると判断できる箇所を、本文中から二文抜き出し、それぞれ始めと終わりの三字を答えよ（句点は含まない）。

問三　傍線部②「斉未及対」、傍線部④「然則竟如何」を、それぞれ（1）すべて平仮名で書き下し（現代仮名遣いでもよい）、（2）平易な日本語に訳せ。但し、傍線部④については、「然」の内容が明らかになるようにせよ。

②　（1）

（2）

④　（1）

（2）

問四　傍線部③「不可比管晏」について、次の問いに答えよ。

（1）「比」の本文中における意味に最も近い熟語を、次のア〜オの中から選べ。

ア　比例　　イ　比肩　　ウ　比重　　エ　比隣　　オ　比喩

（２）　斉平陽が、傍線部③のように判断した理由を、「管晏」と「姚梁公」との相違が分かるように説明せよ。

問五　傍線部⑤「救時之相」とあるが、ここではどのような宰相のことを言っていると考えられるか。三十字以内で答えよ。

問六　「姚梁公」とは、どのような人物であると考えられるか。本文の内容に即して答えよ。

〈講義動画中に使用します〉

「選択形」

❶ A(スル)ハ孰(い)‐与(ヅレゾ)[二]B(スル)ニ[一]　〔A（する）はB（する）に孰与れぞ〕

＊孰‐若
＊何‐与
＊何‐如

（A（する）よりはB（する）（のほうが勝っている）
（A（するの）はB（するの）と比べてどうか）

（例）保[二]‐全(スルヨリハ)一身(ヲ)[一]孰[三]‐若(レゾ)保[二]‐全(スルニ)天下(ヲ)[一]乎。

〔一身を保全するよりは天下を保全するに孰若れぞ。〕
（自分の身を保全するよりは天下を保全するほうがよい。）

（例）楚王之猟(ハ)、孰[二]‐与(レゾ)寡人(ニ)[一]。

〔楚王の猟は、寡人に孰与れぞ。〕
（楚王の狩猟ぶりは、私と比べてどうか。）

❷ 与(リハ)[二]其(ノ)A(セン)[一]孰[二]‐若(レゾ)B(スル)ニ[一]

〔其のA（せ）んよりはB（する）に孰若れぞ〕
（A（する）よりB（する）のほうがよい）

（例）与(リハ)[二]其(ノ)有(ラン)[レ]誉(レ)[二]於前(ニ)[一]、孰[二]‐若(レゾ)無(キニ)[レ]毀(そしり)[二]於其(ノ)後(ニ)[一]。

〔其の前に誉れ有らんよりは、其の後に毀無きに孰若れぞ。〕
（目の前で褒められるよりは、背後でそしられないほうがよい。）

❸ 与(リハ)レＡ寧(ロ)Ｂ　〔Ａよりは寧ろＢ〕　（ＡよりＢのほうがよい・ＡよりＢであれ）

（例）与(リハ)二其(ノ)不孫(ナラン)一也、寧(ロ)固(ナレ)。
〔其の不孫ならんよりは、寧ろ固なれ。〕
（高慢であるよりは、むしろ頑ななほうがよい。）

❹ 寧(ロ)Ａ(（ス）トモ)　無(カレ)レＢ(スル)
〔寧ろＡ（す）ともＢする無かれ〕
（ＡするとしてもＢするな・ＡするとしてもＢしない）

（例）寧(ロ)為(ルトモ)二鶏口(ト)一、無(カレ)レ為(ル)二牛後(ト)一。
〔寧ろ鶏口と為るとも、牛後と為る無かれ。〕
（鶏の口になっても、牛の尻尾にはなるな。
➡小さい集団でも人の上に立ち、大きい集団の末尾にいるな。）

二　次の文章を読んで、後の問に答えよ。設問の都合により一部の訓点等を省いた。

故有人者累、a見有於人者憂。故尭非有人、非見有於人也。吾願去君之累、除君之憂、而独b与道遊於大莫之国（注1）。方舟（注2）而済於河、有虚船来触舟、c雖有惼心之人不怒。有一人在其上、則呼張歙（注3）之。一呼而不聞、於是三呼邪、則必以悪声随之。d向也不怒、而今也怒者、e向也虚而今也実也。A人能虚己以遊世、f其孰能害之。

（『荘子』山木）

（注）１　大莫之国——大いなる寂漠の世界、根源的な自由の境地。
２　方舟——両舟の相並ぶをいう。
３　張歙——「張」は開く（舟を外に向ける）、「歙」は斂める（舟を内に向ける）意。

問一　傍線部ａ、ｂ、ｃ、ｄの読みを送り仮名まで含めてカタカナで答えよ。現代仮名遣いでも構わない。

ａ＝

ｂ＝

ｃ＝

ｄ＝

問二　傍線部ｅを「虚」と「実」の意味を明確にして、現代語訳せよ。

問三　傍線部ｆの読みを送り仮名まで含めて、全文平仮名で答え、かつ現代語訳せよ。現代仮名遣いでも構わない。

問四　傍線部Ａのような、世俗的な無用と無名を志して安らかな自己の人生を全うするような老荘思想の基本的概念を漢字四字で答えよ。

復習問題　第六講

①「雖モ㆑賢ナリト 其レ能ク行ハレン 乎。」をすべて平仮名（現代仮名遣い）で書き下し文にせよ。

②「被徙流沙。」を、全文平仮名（歴史的仮名遣いによる）で書き下した文として最も適当なものを、次の中から一つ選べ。
なお、「徙」は、「うつす」と読む。

ア　りうさにうつさる
イ　りうさにうつせしむ
ウ　りうさもてうつせらる
エ　りうさよりうつしめらる
オ　りうさをかふむりうつさる

③「如㆓吾民㆒何。」の読み方を送り仮名も含めてすべて平仮名で記せ。

④「与リハ㆘其ノ同ジク㆓草木ト㆒腐ラン㆖、孰㆘若レゾ縁リテ㆓方孝孺ニ㆒倶ニ為ルニ㆗忠義之鬼ト㆖。」を現代語訳せよ。

注　腐…朽ち果てる
縁方孝孺…方孝孺〔＝明初期の朱子学者〕の関係者として
為忠義之鬼…「忠義の死者となる」➡「忠義のために死ぬ」ということ

第七講『大唐新語』／『十八史略』

一　次の文章を読んで、後の問に答えよ。但し設問の関係で送り仮名を省いた部分がある。

上元初、吐蕃強盛、詔募猛士以討之。婁師徳以監察御史応募。高宗大悦、授朝散大夫、専総辺任。前後四十余年、恭勤接下、孜孜不怠。狄仁傑入相也、師徳密薦之。及為同列、頗軽師徳、頻擠之外使。師徳知之而不憾。則天覚之、問仁傑曰、師徳賢乎。対曰、為将謹守、賢則臣不知。又問、師徳知人乎。対曰、臣嘗同官、未聞其知人。則天曰、朕之用卿、師徳実薦也、亦可謂知人矣。仁傑大慚而退、歎曰、婁公盛徳、我為其所容、莫窺其際也。当危乱之朝、屠滅者接踵、而師徳以功名終始、識者多之。初、師徳在廟堂、其弟某以資高拝代州都督。将行、謂之曰、吾少不才、位居宰相。汝今

又得二州牧一ヲ、叨(みだりニ)拠(よルハ)二過分一ニ、人ノ所レ嫉(ねたム)也。将(はた)何ヲ以テ終レヘントヲ之ヲ。弟対ヘテ曰ハク、3 自レ今雖レ有下
唾(つば)二某面一者上、亦不二敢言一、但自ラ拭(ぬぐハバ)レ之ヲ、庶(ちかシト)レ不レルニ為ラ二兄之憂ヒト一也。師徳曰ハク、此適(まさニ)為ル二
4 我ガ憂ヒト一也。夫レ前人唾スル者、発スル二於怒リニ一也。汝今拭ハバレ之ヲ、是逆ラフ二前人ノ怒リニ一也。唾不レシテ拭ハ
将ニ二自ラ乾カント一、5 何(い)如(づレゾト)笑ヒテ而受クルニレ之ヲ。弟曰ハク、謹ンデ受クトレ教ヘヲ。師徳与レ人不レルコト競ハ、皆此ノ類也。

（『大唐新語』による）

〔注〕
- ○上元――唐代の年号。
- ○吐蕃――チベットの王国。
- ○婁師徳、狄仁傑――いずれも人名。
- ○監察御史、朝散大夫、都督――いずれも官名。
- ○高宗――唐代の天子。
- ○辺任――辺境の任務。
- ○孜孜――つとめ励むさま。
- ○相――宰相。
- ○擠――おしのける。
- ○外使――外国への使者。
- ○則天――則天武后。
- ○際――際限。
- ○屠滅――ほろびる。
- ○廟堂――朝廷。
- ○州牧――州の長官。

問一　波線部ａ「密」ｂ「頗」ｃ「嘗」の読みを、それぞれ平仮名で記せ。

ａ＝

ｂ＝

ｃ＝

問二　傍線部１「覚レ之」は、何を覚ったのか説明せよ。

問三　傍線部２「大慚而退」とあるが、それはなぜか説明せよ。

問四　傍線部３「自レ今雖レ有下唾二某面一者上、亦不二敢言一」を書き下し文にせよ。

問五　傍線部４「我憂」とは何か、説明せよ。

問六　傍線部５「何二如笑而受レ之」を現代語訳せよ。

問七　婁師徳はどのような人物か、本文の内容を要約しながら百五十字以内で述べよ。

二　傍線部①「尭年鼓腹」（現古融合文中に有。ここでは省略）は、『十八史略』の以下の逸話にもとづく言葉である。以下の漢文を読んで問いに答えよ。（返り点を省略した部分がある。）

帝尭陶唐氏、（略）帝嚳子也。其仁如レ天、其知如レ神。就レ之如レ日、望レ之如レ雲。都二平陽一。茆茨不レ剪、土階三等。（略）治[a]二天下一五十年。不レ知二天下治[b]歟、不レ治歟、億兆願レ戴[c]レ己歟、不レ願レ戴レ己歟一。問二左右一、不レ知。問二外朝一、不レ知[d]。問二在野一、不レ知。②乃微服游於康衢。聞[e]二童謡一。曰、「立二我烝民一、莫レ匪二爾極一。不レ識不レ知、順二帝之則一」。有二老人一、含レ哺鼓レ腹、撃レ壌而歌[f]曰、「日出而作、日入而息。鑿レ井而飲、耕レ田而食。帝力何有二於我一哉」。

『十八史略』

問一　傍線部ａ「治」と共通の主語をもつ動詞を、ｂ～ｆの中から一つ選べ。

問二　傍線部②「乃微服游於康衢」の読み下しとして、正しいものを次の1〜5の中から一つ選べ。

1　乃れ微かに康衢にて服游す
2　乃微服にて康衢を游ぶ
3　乃ち微服して康衢に游ぶ
4　乃れ微して服游に衢を康す
5　乃ち微かに康衢を服游す

問三　尭と並び称される名君を、次の1〜5の中から一つ選べ。

1　明　　2　蘇武　　3　舜　　4　呉　　5　孔明

復習問題　第七講

① 「張頗異(トシ)レ之(ヲ)、…」の傍線部の読み方を、送り仮名も含めて平仮名で書け。

注　張…張約斎。宋代の人。

② 「嘗有(リ)二友人一問(フ)、…」の傍線部の読みを、送り仮名も含めて平仮名で書け（平仮名以外に何も書かないこと）。

③ 「将(タ)安(ンゾ)得(ン)」を現代語訳せよ。

④ 「溥(ふ)天之下莫レ非二王土一」の傍線部を現代語訳せよ。

第八講　『王文成公全書』「文録二」／『論語』・『論語集註』・『論語古義』

一　次の文章を読んで、後の問に答えよ。但し設問の関係で送り仮名を省いた部分がある。

自人之失其所好、仁之難成也久矣。向吾成之在郷党中、刻厲自立、衆皆非笑以為迂腐。[1]成之不為少変。僕時雖稍知愛敬、不従衆非笑、然[2]尚未知成之之難得如此也。今知成之之難得、則又不獲朝夕相与。[a]豈非大可憾歟。修己治人、本無二道。政事雖劇、[b]亦皆学問之地。諒吾成之随在有得。然何従一聞以洗凡近之見乎。愛、莫為助。近為成之思、進学之功、微覚過苦。先儒所謂志道懇切、固是誠意。然[3]急迫求之、則反為私己。不可不察也。日用間、何莫非天理流行。但此心常存而不放、則義理自熟。孟子所謂勿忘勿助。深造自得者矣。学問之功、何可緩。但恐著意把持振

作(さく)センコトヲ一。縦(たと)ヒ復タ有リテレ得ルレ居ルモレ之ニ、4**恐ラクハ不ランレ能ハレ安ンズル耳。**成之之学ハ、想フニ亦正ニ不ランモレ如レ此、以テスルニ二僕ノ所ヲレ見ル、微シク覚ユ三其ノ有ルヲ二近似スル者一。是ヲ以テ不二c敢ヘテ不ンバアラレ尽サ。

（王陽明「文録一」による）

〔注〕
- ○失二其所一レ好――精神的道義を好むことを失う。
- ○成之――王陽明と同郷の篤学の青年で徐守誠(じょしゅせい)のこと。成之はその字(あざな)。　○郷党――郷里。
- ○刻厲――刻苦勉励。　○非笑――誹(そし)り笑う。　○迂腐――迂遠で役立たず。
- ○学問之地――学問を実践する現場。　○随在――随所。　○凡近之見――平凡で卑近な見解。
- ○進学――学問を進める。　○功――努力。工夫。　○過苦――激しすぎる。
- ○私己――個人的な思惑。利己。　○日用――日常。いつでも。　○天理――天道。
- ○流行――あまねく行き渡る。　○不レ放――放縦にならぬこと。
- ○勿レ助――効果を上げるべく無理に助長するな。　○深造――深く達する。
- ○著レ意――意識しすぎて力が入ってしまう。　○把持振作――緊張を持続して心を奮い起こす。

問一　波線部ａ「豈」ｂ「亦」ｃ「敢」の読みを、それぞれ平仮名で記せ。

ａ＝

ｂ＝

ｃ＝

問二　傍線部１「成之不㆓為少変㆒」は、（ア）だれが、（イ）だれの、（ウ）どういうことに対してそうしたというのか、説明せよ。

（ア）

（イ）

（ウ）

問三　傍線部２「尚未㆑知㆓成之之難㆑得如㆒㆑此也」を書き下し文にせよ。

問四　傍線部３「急迫求㆑之、則反為㆓私己㆒」を現代語訳せよ。

問五　傍線部４「恐不㆑能㆑安耳」は何を心配しての発言か。この点に留意して説明せよ。

問六　筆者の考える「学問」のあり方とはどのようなものか。本文の内容を要約しながら百五十字以内で述べよ。

二　次の文章を読んで、後の問に答えよ。ただし、設問の関係上、返り点・送り仮名を付していないところがある。また、Ｂ、Ｃの文章が、Ａの文章についての解説となっていることに注意せよ。

Ａ　司馬牛問仁。子曰、（1）仁者其言也訒。曰、其言也訒、斯謂之仁已乎。子曰、為（2）之難。（3）言之得無訒乎。

（『論語』顔淵篇）

Ｂ　訒忍也、難也。仁者心存而不放、故其言若有所忍而不易発。蓋其（4）徳之一端也。夫子以牛多言而躁、故告之以此。牛意仁道至大、不但如夫子之所言。故夫子又告之以此。蓋心常存、故事不苟。（5）事不苟、故其言自有不得而易者。

（朱熹『論語集註』顔淵篇）

C

仁者専ラ務メ二力行ニ一、而不二以テレ易ヲ為サレ之ヲ。故ニ其ノ言不レ得レ無レ訒。苟（いやシクモ）易ニセバ二其ノ言ヲ一、則チ無シ二由リテ以テ入ルレ徳ニ一矣。

（伊藤仁斎『論語古義』顔淵篇）

〔注〕○司馬牛――子の門人。　○易発――簡単に発する。　○躁――さわがしい。

問一　傍線部１「仁者其言也訒」を書き下し文にした場合、最も適切なものを次の中から一つ選べ。

a　仁は其れ訒なりと言ふ。
b　仁は其の言や訒なり。
c　其の言に仁たる者は訒なり。
d　其の言に仁たるや訒なり。
e　仁者は其の言や訒なり。
f　仁者は其れ訒なりと言ふ。

問二　傍線部２「之」は何を指すか。最も適切なものを次の中から一つ選べ。

a　言　　b　訒　　c　仁　　d　問

問三　傍線部３「言之得無訒乎」中の「訒」とはどのような意味か。最も適切なものを次の中から一つ選べ。

a　何事も軽々しく行わず言葉もたやすく発しない。
b　仮定による発言をせず確信のあることのみを話す。
c　心の中に常に仁愛を持ち慎重に事にあたる。
d　ささいな事に拘泥せず堂々とした態度をとる。

問四　傍線部３について、子が「言之得無訒乎」と述べた理由を、Ｃの文章の見解に従って解釈した場合、最も適切なものを次の中から一つ選べ。

a　言葉にし難いことは仁ある行為とはいえないから。
b　言葉が軽薄では仁ある人とは見なせないから。
c　仁ある人は実行を重んじ軽々しくは発言しないから。
d　おしゃべりで慎みがないのでは君子とはいえないから。

問五　傍線部４「徳之一端」の意味として、最も適切なものを次の中から一つ選べ。

a　仁という徳につながる正しい道。
b　仁という徳を知るための重要な要素。
c　仁という徳へと至る糸口の一つ。
d　仁という徳を成し遂げる目的の一つ。

問六　傍線部５「事不苟、故其言自有不得而易者」の意味として、最も適切なものを次の中から一つ選べ。

a　何事も軽々しく行わないので、自然と言葉も軽率ではないようになるのである。
b　仮定で物事を行うことがないので、知らぬうちに安易な言葉を吐かなくなるのである。
c　事を一時しのぎに行わないので、言葉の中には変わらぬ安定感が存するのである。
d　いやしい事を行わないので、自分の言葉が落ち着いたものとなるのである。

問七　Ｃに述べられた主張として、最も適切なものを次の中から一つ選べ。

a　徳へとつながる道を行くには、行動が伴った実のある言葉を大切にせざるを得ない。
b　行動と言葉に偏りがなくなって、はじめて徳を体現する人と言うことができる。
c　実践ばかり重んじて言葉に思い至らないようでは、徳のある人物にはなり得ない。
d　軽率にものを言い実践に努めないようでは、徳へとたどりつくことはできない。

問八　次の文章はＡの文中の「子」に関するものである。文中の空欄ａ〜ｃに入る語句を考えて補充せよ。

「子」は、［ａ］と呼ばれて尊敬される春秋時代の思想家で、名は［ｂ］、字は仲尼といった。「子」は、徳を修めて君子となる道を説き、［ｃ］の祖とされる。

ａ＝　　　　ｂ＝　　　　ｃ＝

復習問題　第八講

①「務(メテ)二其(ノ)小(ヲ)一、而忘(ルルモ)二其(ノ)大(ヲ)一、<u>亦不可</u>也。」の傍線部を送り仮名も含めて平仮名で訓読せよ。

②「牛<u>不(ハ)レ能</u>レ生(ム)レ馬。」の傍線部の読みを記せ。

③「不敢不拝。」は、「あへてはいせずんばあらず」と読む。この読み方に従って返り点をつけよ（送り仮名は不要）。また、現代語訳せよ。

注　拝…お辞儀をする。

不　敢　不　拝　。

〔現代語訳〕＝

第九講　『晋書』／『冥報記』

一　次の漢文は、東晋の王羲之（おうぎし）が、永和九（三五三）年三月三日、会稽（かいけい）（今の中国の浙江省にある）郊外にある蘭亭（らんてい）で近隣の名士たちと集い、曲水の宴を催した際に、人々が作った詩をまとめ、その序として書いたものです。この文章を読んで、後の設問に答えなさい。ただし、設問との関連で、送り仮名・返り点の一部を省略してあるので注意しなさい。

永和九年、歳（とし）在（り）癸丑（きちう）。［ 1 ］、会（す）于会稽山陰之蘭亭（に）、修（むる）禊（けい）事（を）也。群賢畢（ことごとく）至（り）、①少長咸（みな）集（まる）。此（の）地（に）有（り）崇山峻嶺、茂林修竹。又有（りて）清流激湍（たん）、映帯（す）左右（に）。引（きて）以（て）為（し）流觴（の）曲水（と）、列坐（す）其（の）次（に）。雖（も）無（しと）糸竹管絃之盛（んなる）、一觴一詠、亦足（る）以（て）暢（ちやう）叙（じよスルニ）幽情（を）。是（の）日也、天朗（らかに）気清（く）、恵風和（わ）暢（ちやうス）。仰（ぎて）観（る）宇宙之大（なるを）、俯（して）察（す）品類之盛（んなるを）。所（に）以（して）遊（ばせ）目（を）騁（はス）懐（を）、足（る）以（て）極（むるに）視聴之娯（しみを）、信（に）可（き）楽（しむ）也。夫（れ）人之相②与（に）俯仰（するや）一世（に）、或（いは）取（りて）諸（これを）懐（くわい）抱（はうニ）、悟言（す）一室之内（に）、或（いは）因（りて）寄（せて）所（に）託（する）、放浪（す）形骸之外（に）。雖（も）趣舎万殊（にして）、静躁不（と）同（じから）、当（たりては）其（の）欣（び）於所（に）遇（ふ）、暫（く）得（るに）於己（に）、快然（として）自（ら）足（り）、③不（ず）知（ら）老之将（に）至（らんとするを）。及（んで）其（の）所（の）之（く）既（に）倦（み）、情随（ひて）事（に）遷（るに）、感慨係（る）之（に）。

矣。向(さき)之所ハレ欣(よろこ)ブ、④俛仰之間、已(すで)ニ為ル二陳跡ト一。⑤猶不能不以之興懐。況ンヤ修短随ヒレ化ニ、終ニ期スルヲヤ二於尽クルニ一。古人云ヘラク、死生モ亦大ナリト矣。⑥豈不レ痛哉。毎ニレ覧ル二昔人興感之由ヲ一、若シレ合ハスガ二一契ヲ一。⑦未嘗不臨文嗟悼、不能喩之於懐。固ヨリ知ル、一ニスルハ二死生ヲ一為リ二虚誕一、斉(ひとしくする)ハ二彭(はう)殤(しやう)ヲ一為ルヲ二妄作ト一。後之視ルモレ今ヲ、亦⑧猶ホ二今之視ルガレ昔ヲ一。悲シイ夫。故ニ列二‐叙シテ時人ヲ一、録ス二其ノ所ヲレ述ブル。雖モ二世殊ナリ事異ナルト一、所二‐以ハ興スレ懐ヒヲ、其ノ致一也。後之覧ル者モ、亦将ニレ有ラントレ感ズル二於斯ノ文ニ一。

〔注〕
○癸丑――みずのとうし。その年を干支で言ったもの。
○修禊事――三月三日の禊(みそぎ)の行事をおこなう。　○崇山峻嶺――高い山や険しい峰。
○茂林修竹――茂った林や長く伸びた竹。　○激湍――急流。
○映帯左右――辺りに映えている。　○流觴曲水――盃を流す曲がりくねった流れ。觴は、盃。
○暢叙幽情――深遠で高雅な思いを存分に述べる。　○恵風――おだやかな風。
○宇宙――天地。また天空。　○品類――万物。　○取諸懐抱――心に抱く思いを表出する。
○悟言――向かい合って語る。
○因寄所託――自らが託するものにまかせる。
○放浪形骸之外――肉体を忘れて心を自由に遊ばせる。形骸は、肉体。

○趣舎――取捨選択。人生の過ごし方をいう。
○静躁――静と動。　○所遇――境遇。
○快然――気持ちのよいさま。　○陳跡――過去の事。　○修短――寿命の長短。
○化――天地万物の変化。　○期――決まっている。　○興感――感慨をもよおす。
○合一契――割り符が合う。　○嗟悼――嘆き悲しむ。　○一死生――生と死を同一視する。
○虚誕――いつわり。　○斉彭殤――長寿と夭逝とを同じと考える。
○妄作――いい加減なつくりごと。
○列叙時人――この日、蘭亭に集まった人々の名を列挙する。
○斯文――蘭亭に集まった人々が作った詩文。　○出典は、『晋書』王羲之伝。

問一　［1］には「旧暦三月上旬の頃」を表す語が入る。最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　陽春之候　　イ　暮春之初
ウ　仲春之候　　エ　孟春之初

問二　傍線部①「少長」のここでの意味として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　年かさの少年たちは　　イ　やや年輩の人々は
ウ　年若い長（おさ）たちは　　エ　老いた者も若い者も

問三　傍線部②「与」のここでの読み方として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　与(あた)へて　　イ　与(とも)に

ウ　与(ため)に　　エ　与(よ)りは

問四　傍線部③「不レ知二老之将レ至」（返り点のみ施してある）のここでの意味として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　老いが我が身にやがて訪れることも忘れている

イ　老いてどのように我が身を処してよいのかもわからない

ウ　老いがどのように訪れるのかは予測できない

エ　老いてやがてあの世に行き着くのだとは考えない

問五　傍線部④「俛仰之間」（俛は俯と同じ）のここでの意味として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　広大な空間にわたって

イ　つかの間のうちに

ウ　悠久の時間をかけて

エ　わずかの隙間もなく

問六　傍線部⑤「猶不能不以之興懐」（「そのために人の心に感慨を生じさせずにはおかない」という意）を訓読する際に施す返り点として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　猶不レ能レ不二以レ之興一レ懐

イ　猶レ不レ能不二以レ之興一レ懐

ウ　猶下不レ能二不以一レ之興上懐

エ　猶不二能不レ以レ之興一レ懐

問七　傍線部⑥「豈不レ痛哉」（返り点のみ施してある）のここでの意味として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　どうして痛ましいことがあろうか　　イ　痛ましくないわけではない

ウ　何とも痛ましいことではないか　　エ　痛ましくないのはなぜか

問八　傍線部⑦「未嘗不臨文嗟悼、不能喩之於懐」（「古人が残した文を前に痛み嘆かずにはいられないが、その理由を我と我が心にもさとすことができない」の意）の書き下し文として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　未(いま)だ嘗(かつ)て文(ぶん)に臨(のぞ)めば嗟悼(さたう)す、之(これ)を懐(こころ)に喩(さと)ること能(あた)はざらん

イ　未(いま)だ嘗(かつ)て文(ぶん)に臨(のぞ)みて嗟悼(さたう)して、之(これ)を懐(こころ)に喩(さと)ること能(あた)はずんばあらず

ウ　未(いま)だ嘗(かつ)て文(ぶん)に臨(のぞ)みて嗟悼(さたう)せずんばあらざるも、之(これ)を懐(こころ)に喩(さと)ること能(あた)はず

エ　未(いま)だ嘗(かつ)て文(ぶん)に臨(のぞ)みて嗟悼(さたう)せず、之(これ)を懐(こころ)に喩(さと)ること能(あた)はず

問九　傍線部⑧「猶」のここでの意味として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。なお、「猶」を含む句には返り点のみ施してあります。

ア　それでもまだ〜だ　　イ　ちょうど〜のようだ

ウ　意外にも〜だろう　　エ　そもそも〜だ

問十　本文の内容と合致するものとして最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　好天気に恵まれ、美しい山や水流といった絶景もみごとな中、曲水の宴は、楽の音もにぎやかに、詩を詠じたり酒を飲んだり、実に心楽しいものであった。

イ　筆者は、この曲水の宴で詠まれた詩やこの序を後世の人々が見ても、実際に宴に加わった筆者たちの感動そのものをわかってはもらえないだろう、と諦めている。

ウ　筆者は、晴れやかな曲水の宴を心から楽しんでいたが、ふと誰しも老いや死の愁いから免れないという思いに駆られ、どんな楽しみも色あせ過去のものとなっていくものだと感じている。

エ　筆者は、人はそれぞれ志や生き方に違いはあれ、自分の境遇に満足して生きることによってこそ、老いと死の愁いから免れることが可能だと期待を示している。

二　次の文章を読んで、後の問に答えよ。ただし、設問の関係で返り点・送り仮名を付していないところがある。

夫含気有生、無不有識、有識而有行、随行善悪而受其報。如農夫之播植、随所植而収之。此蓋物之常理、固無可疑也。［X］中品達其本源、知而1無見、下愚闇其蹤跡、迷而不返、皆2絶言也。中品之人、未能自達、随縁3動見、遂見生疑。疑見4多端、各懐異。執釈典論其分別、凡有六十二見。邪倒於是乎生者也。

臨在5中人之後。幸而寤其6万一。7比見衆人不信因果者説見雖多、同謂善悪無報。無報之説、略有三種。一者自然。故無因果。8唯当任欲待事而已。二者滅尽。言、死而身滅、識無所住。身識都尽、誰受苦楽。以無受故、知無因果。三者無報。言、見今人有修道徳、貧賤則早死、或行凶悪、富貴霊長。以是事故、知無因果。

臨窃(ひそカニ)謂(おもフニ)、儒書(ハ)論(ズルコト)二善悪之報(ヲ)一甚(ダ)多(シ)。O近(キ)者(ハ)報(イ)二於当時(ニ)一、P中(ナル)者(ハ)報(イ)二於累年之外(ニ)一、Q遠(キ)者(ハ)報(ユ)二於子孫之後(ニ)一。

（『冥報記』序）

〔注〕○気――万物生成の根源　○識――認識　○播植――種まくことと苗を植えること
○蹤跡――行動のあと、事蹟(じせき)　○釈典――仏典　○六十二見――六十二の異端の説
○臨――冥報記の撰者、唐臨の自称

問一　本文冒頭では、何を何に例えているか。次の中から適切なものを二つ選べ。

a　「気」を種に例えている。　b　「善悪」を「常理」に例えている。
c　「報」を収穫に例えている。　d　「識」を「農夫」に例えている。
e　「行」を「播植」に例えている。

問二　空欄 X に入る語として、最も適切なものを次の中から一つ選べ。

a　上智　b　上品
c　上戸　d　上愚

問三　傍線部１「無見」、傍線部３「動見」の「見」はどういう意味か。次の中から最も適切なものをそれぞれ一つ選べ。

a　面会　　b　出現方法　　c　認識作用一般　　d　誤った見解

１＝　　３＝

問四　傍線部２「絶」、傍線部７「比」と同じ字義で用いられているものはどれか。次の中から最も適切なものをそれぞれ一つ選べ。

２　a　絶技　　b　絶交　　c　絶後　　d　絶海　　e　気絶

７　a　比定　　b　比況　　c　比肩　　d　比来　　e　無比

問五　傍線部４「多端」、傍線部６「万一」はそれぞれどういう意味か。次の中から最も適切なものを一つ選べ。

４　a　複雑多岐　　b　多事多忙　　c　多情多恨　　d　好事多魔

６　a　ひょっとして　　b　端から端まで　　c　ほんの少し　　d　偶然

問六　傍線部５「中人之後」とはどういう意味か。次の中から最も適切なものを一つ選べ。

a　中品の人の子孫　　b　中品の人の背後

c　中品の人の末席　　d　最後の中品の人

問七　傍線部８の書き下し文として、最も適切なものを次の中から一つ選べ。（※筆者注：選択肢入試問題そのままです）

a　ただ任に当たりて事を待たんと欲するのみ。
b　ただまさに事を待ちて欲に任すべきのみ。
c　ただまさに欲に任せ事を待つべきのみ。
d　ただ任に当たり欲は事を待つのみ。

問八　唐臨は、二重傍線部「無報之説」として三種を挙げ、その理由を述べているが、これに当てはまらないものを、次の中から二つ選べ。

a　人類が消滅すれば、苦楽を享受する者も消滅するから。
b　道徳を修養しても貧しければ早世し、凶悪なことをしても裕福ならば長寿であるから。
c　死んで身体がなくなれば、苦楽を認識することもないから。
d　あるがままの自然に因果関係などあり得ないから。
e　身分の低い有徳者より、身分さえ高ければ凶悪犯の方が長生きするから。

問九　以下の例は、傍線部Ｏ「近者」、傍線部Ｐ「中者」、傍線部Ｑ「遠者」のどの例に当たるか、それぞれ答えよ。

ａ　始皇帝が暴虐であったために子孫が滅んだ。

ｂ　先祖が職分を全うしたので、孔子は儒教を天下に広めることができた。

ｃ　楚の恵王が臣下をかばって蛭（ひる）を飲み込んだところ持病が治癒した。

ｄ　孫叔敖（そんしゅくごう）は幼い時、目にすると死ぬという両頭の蛇を殺し、他人の目に触れぬように埋めたところ、後に大出世した。

ｅ　宋の襄公（じょうこう）が行うべき祭祀を捧げなかったところたくさんの隕石（いんせき）が墜ちた。

ａ＝　　　ｂ＝　　　ｃ＝　　　ｄ＝　　　ｅ＝

復習問題　第九講

①　「請（まね）キ二旅人一ヲ、相与娯楽ス。」の傍線部の読み方を、送り仮名も含めてすべて平仮名で記せ。

②　「無少長愚智、皆知ルモレ高キヲ、…」の傍線部を現代語訳せよ。

③　「母老多二疾病一。未三嘗離二左右一。」の傍線部をすべて平仮名（現代仮名遣い）で書き下せ。また、現代語訳せよ。

④　「未嘗不束帯」を書き下し文にせよ。

注　束帯…「束帯す」

第十講　『白居易集』／『小雪日、香亭弟贈灰鼠裘』・『礼記』／「詩人」

一　次の詩を読んで、後の問に答えよ。――返り点と送り仮名を一部省略してある。――

海天［Ａ］ニ望メバ夕ベ茫茫タリ
山勢川形闊（ひろ）ク［Ｂ］長シ
灯火万家城ノ四畔
星河［Ｃ］道水ノ中央
①風ハ吹ク㆓古木㆒ヲ晴天ノ雨
月ハ照ラス㆓平沙㆒ヲ夏夜ノ［Ｄ］
②能就㆓江楼㆒銷㆑暑否
比スレバ㆓君ガ茅舎㆒ニ校（はなは）ダ清涼

（『白居易集』による）

〔注〕
海天――海の水平線のかなた。　茫茫――広々として果てしないさま。
四畔――四辺。　江楼――水辺のたかどの。
銷――消える、消す。　茅舎――茅葺きの家、粗末な家。

問一　空欄ＡからＤまでには次のア～ケのいずれかの文字が入る。適切なものを一つ選べ。

ア　星　　イ　光　　ウ　一　　エ　霜　　オ　両
カ　西　　キ　花　　ク　復　　ケ　東

Ａ＝　　Ｂ＝　　Ｃ＝　　Ｄ＝

問二　傍線部①を現代語に訳せ。

問三　傍線部②をすべて平仮名の書き下し文に直せ。

問四　この詩の作者は「君」に何を勧めようとしているのか、本文に即して簡潔に説明せよ。

二　（Ａ）は清朝の詩人、袁枚（えんばい）の「小雪日、香亭弟贈灰鼠裘（小雪の日、香亭弟　灰鼠裘（くわいそきう）を贈る）」という詩である。（Ｂ）は『礼記』の文章である。よく読んで、後の問いに答えよ。（設問の都合で返り点、送り仮名を省いたところがある。）

（Ａ）

①雪珠如豆打茅茨

阿弟貽（おくルニ）レ裘ヲ趁（したがフ）二此ノ時ニ一

仙鼠蒙（もう）茸（じようトシテ）真（まことニ）可レク愛ス

②老身長短更相宜

著（つ）ケ来タリ小（いさ）サカ試ミテ妻孥（ど）ニ看（み）シメ

③分得余温手足知

但（ただ）願ハクハ多情如ク二晏相ノ一

一タビ披（き）テ便（すなは）チ作（な）サンコトヲ二卅（さんじふ）年ノ期ヲ一

（B）曾子(そうし)曰(いハク)、「晏子(あんしハ)可キレ謂フレ知ルトレ礼ヲ也已(のみ)。恭敬之レ有リト焉。」有若曰ハク、「晏子ハ一狐裘三十年、遣車一乗、及ビテレ墓ニ而反(かへル)。国君ハ七个(か)、遣車七乗。大夫ハ五个、遣車五乗、④晏子焉知礼。」曾子曰ハク、「国ニ無ケレバレ道、君子ハ恥ヅレ盈(みタスヲ)レ礼ヲ焉。国奢(おごレバ)、則チ示スニレ之ニ以テシレ倹ヲ、国倹ナレバ、則チ示スニレ之ニ以テストレ礼ヲ。」

〔注〕小雪――二十四節気のひとつ。立冬後の十五日前後。　香亭――袁枚の弟、袁樹の号。　灰鼠――リスの一種。
裘――皮ごろも。　雪珠――あられ、みぞれ。　茅茨(ぼうし)――かやぶきの屋根。　阿弟――阿は親しみを表す接頭語。
仙鼠――ここは灰鼠に同じ。　蒙茸――毛がふさふさとしたさま。　著――着に同じ。　妻孥――妻や子ども。
晏相――晏嬰。春秋時代の斉の宰相。晏子と称される。　披――服をはおる。　卅――三十。　曾子・有若――孔子の弟子。
遣車――送葬の時に供物を載せる車。　个――個に同じ。供物を数える単位。

問一　傍線部①「雪珠如豆打茅茨」に訓点（送り仮名と返り点）を施せ。

雪　珠　如　豆　打　茅　茨

問二　傍線部②「老身長短更相宜」を平易な日本語に訳せ。

問三　傍線部③「分得余温手足知」の解釈について、次のア〜オから最も適当なものを選べ。

ア　自分の手足のように大切な妻や子にも皮ごろもの温(ぬく)もりを分けてやり、その暖かさを伝えたい。
イ　分けてもらった皮ごろもで手を暖めることができれば、それ以上は求めない。
ウ　皮ごろもを見せてやるだけで妻や子の手足までもが暖かくなる様子が見て取れる。
エ　身に着けた皮ごろもの温もりが伝わって、手や足の先まで暖かくなるのが分かる。
オ　弟の心の温かさが皮ごろもに込められており、わたしの手や足を暖めてくれる。

問四　傍線部④「晏子焉知礼」を（１）すべて平仮名で書き下し文に改め（現代仮遣いでもよい）、（２）平易な日本語に訳せ。

（１）

（２）

問五　（Ｂ）の対話からうかがえる曾子と有若の「礼」に対する考え方について、次のア～オから最も適当なものを選べ。

ア　曾子が礼を行う際の心のあり方に注目するのに対して、有若は礼の形式に従うことをより重視している。
イ　曾子が身分にとらわれない形の礼を考えるのに対して、有若は身分に応じた形の礼を考えている。
ウ　曾子が心身を陶冶（とうや）するものとして礼を考えるのに対して、有若は礼と心とを分離して考えている。
エ　曾子が国の貧富によって礼は変化するものと考えるのに対して、有若は礼を不変的なものであると考えている。
オ　曾子が国の治乱を君主が礼を守るか否かによると考えるのに対して、有若は臣下の礼の遵守をより重視している。

問六　曾子が「一狐裘三十年」である晏子を「礼を知る」者と評するのはなぜか。その理由を説明せよ。

問七　袁枚は晏子が一着の狐裘を三十年も使い続けた理由をどのように考えているか。五十字以内で説明せよ。

〈講義動画中に使用します〉

「詩の形式」

●古体詩…唐以前の詩で、字数・句数は不定。

●近体詩…唐以降の規則に従って作られた詩。**絶句・律詩・排律。**

「　　　の詩人」

【　　　】

・字＝太白（たいはく）。

・「　　　」と称される。

・玄宗皇帝に仕えるが、後に追放される。

・自由奔放な作風。

・酒・自然・友人の歌が多い。

【　　　】

・「　　　」と称される。

・玄宗皇帝に認められるものの、左遷され、その後は不遇。

・不遇な人生から、憤りや悲しい内容の詩が多い。

・政治・社会を描いたものも多い。

【その他】…**孟浩然**（もうこうねん）・**王維**（おうい）（←「詩仏（しぶつ）」と言われる）など

「中唐の詩人」

【　　　　】

・字＝楽天。

・平安時代の日本に与えた影響大。『枕草子』や『源氏物語』にも引用される。

・平明な詩風（「元白体（げんぱくたい）」）。

・『　　　　』（←玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋が題材）・『　　　　』が代表作品。

【その他】…**韓愈（かんゆ）**・**柳宗元（りゅうそうげん）**など

復習問題　第十講

① 空欄[X]に入れるのに最も適切な語はどれか。後の中から一つ選べ。

閨房ノ怨緒惣（すベテ）無シレ端
万事呑ミテレ心ニ不レ表サレ肝ヲ
胸火燃エ来リテ誰カ敢ヘテ滅セン
紅深キ袖ノ涙不レ応ニカラレ[X]

ア　却　　イ　流　　ウ　払　　エ　干　　オ　対

② 「国焉得無亡乎。」を書き下し文にせよ。ただしすべて平仮名で記すこと。現代仮名遣いでもよい。また、現代語訳せよ。

③ 杜甫と同時代の詩人を、次の中から一人選べ。

ア　白居易　　イ　蘇軾　　ウ　韓愈　　エ　李白

④　杜甫は「詩聖」とよばれた。それに対して李白は何とよばれたか。漢字二字で答えよ。

⑤　次の文章の空欄にあてはまる語として最もふさわしいものを、後の中から選べ。

太宗の時代は、文学史では初唐とされ、（　Ａ　）の基礎が確立された。中唐の詩人としては平易な詩風が特色で、代表作の（　Ｂ　）で有名な白居易や、また、他には（　Ｃ　）がいる。

ア　古体詩　　イ　近体詩　　ウ　「月下独酌」　　エ　「長恨歌」
オ　王維　　カ　杜甫　　キ　韓愈

Ａ＝　　　　Ｂ＝　　　　Ｃ＝

第十一講　『清波雑志』／文学史(1)

一　次の文章は、南宋の周煇(しゅうき)の作である。読んで問いに答えよ。なお、設問の都合上、一部訓点を省いたところがある。

(ア)「借(スモ)レ書(ヲ)一瓻(ち)、還(スモ)レ書(ヲ)一瓻」、後訛(かシテ)為(スハ)レ「痴(ト)」、殊(ニ)失(フ)二忠厚(ノ)気象(ヲ)一。書(ハ)非(ズ)二天(ヨリ)降(リ)地(ヨリ)出(ヅルニハ)一、必(ズ)因(リテ)レ人(ニ)得(レ)レ之(ヲ)、得(テ)而秘(シテ)レ之(ヲ)、自(ラ)示(スコト)不(レバ)レ広(カラ)、人(モ)亦(タ)(a)豈肯以未見者相仮。唐(ノ)杜(と)暹(せんノ)家書、末(ニ)自(ラ)題(シテ)云(フ)「清俸(モテ)買(ヒ)来(タリ)手(ヅカラ)自(ラ)校(ス)。子孫読(ミ)レ之(ヲ)知(レ)二聖道(ヲ)一。鬻(ひさグト)及(ビ)借(スモテ)レ人(ニ)為(スト)二不孝(ト)一」。鬻(グモテ)為(スハ)二不孝(ト)一、可(ナリ)也。借(スモテ)為(スハ)二不孝(ト)一、過(ギタリ)矣。然(レドモ)煇手(ヅカラうつスニ)抄(スニ)レ書(ヲ)、(b)前後遺失亦多、未免往来于懐。因(リ)読(ムニ)二唐子西(ノ)「失茶具説(ヲ)」一、釈然(トシテ)不(二)復(タ)芥蔕(かいたいセ)一。其(ノ)説(ニ)曰(ク)「吾家失(フ)二茶具(ヲ)一、(1)戒婦勿求。婦曰(ク)『何(ゾや)也(ト)』。吾応(ヘテ)レ之(ニ)曰(ク)『彼(ノ)窃(ぬすム)者、必(ズ)其(ノ)所(ナレバ)レ好(ム)也。心之所(ナレバ)レ好(ム)、則(チ)思(ヒ)レ得(ンコトヲ)レ之(ヲ)、懼(レ)二吾(ノ)靳(をシミ)レ之(ヲ)不(ルヲ)レ予(ヘ)也、而(シテ)窃(ム)レ之(ヲ)、則(チ)斯(ノ)人(タル)也(や)、得(タリ)二其(ノ)所(ヲ)レ好(ム)矣。得(レバ)二其(ノ)所(ヲ)レ好(ム)、則(チ)宝(トシ)レ之(ヲ)、懼(レ)二其(ノ)泄(もレンコトヲ)一而(シテ)秘(シ)レ之(ヲ)、懼(レ)二其(ノ)壊(こぼタレンコトヲ)一而(シテ)安二-置(ス)之(ヲ)一、則(チ)是(ノ)物(タル)也(や)、得(タリ)二其(ノ)所(ヲ)レ託(スル)矣。人(ハ)得(二)其(ノ)所(ヲ)レ好(ム)、物(ハ)得(タリ)二其(ノ)所(ヲ)レ託(スル)、

（イ）復何言哉』。婦曰ク『嘻（ああ）、是レ（2）烏得不貧』」。煇モ亦タ云（しかい）フ。

（周煇『清波雑志』による）

〔注〕○瓻――酒瓶。古代中国では「瓻」に酒を満たし書を借してくれたことへの謝礼とした。
○痴――「瓻」と発音が類似する。　○杜暹――唐（六一八～九〇七）の人。　○清俸――俸給。
○校――校定すること。　○鬻――売ること。　○懐――ここでは「心」と同じ。
○唐子西――北宋（九六〇～一一二七）の人唐庚（とうこう）。子西は字（あざな）。
○芥蔕――胸につかえること。わだかまりとなること。　○靳――惜しむこと。

問一　傍線の箇所（1）「戒婦勿求」、（2）「烏得不貧」を、すべて平仮名で書き下せ。現代仮名遣いでよい。

（1）

（2）

問二　傍線の箇所（a）「豈肯以未見者相仮」、（b）「前後遺失亦多、未免往来于懐」を口語訳せよ。

（a）

（b）

問三　傍線の箇所（ア）「借書一瓻、還書一瓻」の「瓻」が、「痴」に変わって「借書一痴、還書一痴」となった場合、どのような意味になるか。三十字以内で記せ。

問四　傍線の箇所（イ）「復何言哉」は、唐子西のどのような考えに基づくか。四十字以内で記せ。

問五

（ⅰ）文中の杜暹、唐子西、唐子西の婦、およびこの文章を書いた周煇のうち、考え方の共通する二人をあげよ。

（ⅱ）二人の考え方の共通する点を、五十字以内で記せ。

〈講義動画中に使用します〉

『詩経』（←「五経」の一つ）
・黄河流域の北方文学
・中国最古の詩歌集
・孔子が編集したといわれている

『楚辞』
・長江流域の南方文学の歌謡集
・代表的詩人＝**屈原**

『史記』
・作者＝前漢の**司馬遷**
・紀伝体の歴史書
・「紀伝体の祖」といわれる

『漢書』
・作者＝後漢の**班固**
・紀伝体の歴史書

『桃花源の記』

・作者＝東晋の＊**陶淵明**（とうえんめい）**（陶潜）**（とうせん）

＊田園詩人として老荘思想に影響を受ける

『文選』（もんぜん）

・作者＝梁の**昭明太子**（しょうめいたいし）

・詩文集

『三国志』

・作者＝西晋の**陳寿**（ちんじゅ）

『後漢書』

・作者＝南朝宋の范曄（はんよう）など

・「東夷伝」に日本に関する記述あり

『資治通鑑』（しじつがん）

・作者＝宋の**司馬光**

・編年体で書かれた歴史書

『十八史略』

・作者＝元の曾先之（そうせんし）

・編年体で書かれた歴史書

復習問題　第十一講

① 「先生ノミ独リ不ルハレ拝セ、何ゾ也ト。」を、すべて平仮名（現代仮名遣い）で書き下し文にせよ。また、現代語訳せよ。

注　拝…お礼の拝礼。

② 「（衣食を整えるには十分な財産があるのに、さらに財産を増やして余財を作ることは）但教二子孫怠惰一耳。」の傍線部を書き下し文に改めよ。

③ 「材(さい)アル者豈肯付二権勢一哉。」の傍線部を現代語訳せよ。

注　材…才能。

④ 江淹や司馬長卿らの作品は、梁の時代の昭明太子によって編纂された詩文集に収められている。平安時代の日本でもよく読まれ、『枕草子』にも書名の見えるこの詩文集の名称を漢字で書け。

第十二講 『東坡全集』「范文正公集序」／文学史(2)

一 次の文章は、北宋の蘇軾（そしょく）が、范仲淹（はんちゅうえん）の文集『范文正公集』に寄せた序文の前半部分である。読んで問いに答えよ。なお、設問の都合上、文字を改め訓点を省いたところがある。

慶暦三年、軾始総角入郷校。士有自京師来者、以魯人石守道所作慶暦聖徳詩示郷先生。軾従旁竊観、則能誦習其詞、問先生以所頌十一人者何人也。先生曰、童子何用知之。軾曰、此天人也耶、則不敢知。(ア)若亦人耳、何為其不可。先生奇軾言、尽以告之、且曰、韓・范・富・欧陽、此四人者、人傑也。(1)時雖未尽了、則已私識之矣。嘉祐二年、始挙進士、至京師、則范公没。既葬而墓碑出。読之至流涕、曰、(イ)吾得其為人。蓋十有五年而不一見其面、(a)豈非命也歟。是歳登第、始見知于欧陽公。因公以識韓・富。皆以国士待軾、曰、恨子不識范文正公。其後三年、過許、始識公之仲子今丞相尭夫。又六年、始見

其叔彝叟京師。又十一年、遂与其季徳孺同僚于徐。皆一見如旧。且以公遺稿、(b)見属為序。又十三年、(2)乃克為之。嗚呼、公之功徳、蓋不待文而顕、其文亦不待序而伝。(ウ)然不敢辞者、自以八歳知敬愛公、今四十七年矣。彼三傑者、皆得従之遊、而公独不識、以為平生之恨。若獲掛名其文字中、以自托於門下士之末、豈非疇昔之願也哉。

（蘇軾「范文正公集序」による）

〔注〕
○慶暦――北宋仁宗朝の年号。慶暦三年は一〇四三年。　○総角――幼少期の髪の結い方。転じて幼年のこと。
○京師――都のこと。　○魯――山東省の別称。　○石守道――北宋の学者、石介のこと。
○韓・范・富・欧陽――韓琦、范仲淹、富弼、欧陽脩。いずれも北宋中期の名臣。
○嘉祐――北宋仁宗朝の年号。嘉祐二年は一〇五七年。
○挙進士――官吏登用試験「科挙」に合格すること。　○范文正公――范仲淹のこと。
○許――許州。現中国河南省の都市。　○仲子――次男。　○尭夫（ぎょうふ）――范仲淹の息子、范純仁。
○叔――上から三番目の兄弟。　○彝叟（いそう）――范仲淹の息子、范純礼。　○季――末の弟。
○徳孺（とくじゅ）――范仲淹の息子、范純粋。　○徐――徐州。現中国江蘇省の都市。

○掛名――名前を出すこと。　○疇昔（ちゅうせき）――以前。昔。

問一　傍線の箇所（1）「時雖未尽了」、（2）「乃克為之」を、すべて平仮名で書き下せ。現代仮名遣いでよい。

（1）

（2）

問二　傍線の箇所（a）「豈非命也歟」、（b）「見属為序」を口語訳せよ。

（a）

（b）

問三　傍線の箇所（ア）「若亦人耳、何為其不可」を口語訳せよ。

問四　傍線の箇所（イ）「吾得其為人」とあるが、これは蘇軾の范仲淹に対する認識がどのように深まったことを示すか。そのきっかけとなった出来事に触れつつ、五十字以内で記せ。

問五　傍線の箇所（ウ）「然不敢辞者」とあるが、その理由について、三十五字以内で記せ。

〈講義動画中に使用します〉

「散文」

古文…秦・漢以前の、内容重視の文章。『孟子』、『荀子』など。

↓

四六騈儷文（しろくべんれいぶん）…六朝時代から唐にかけての、修辞的技巧を重視する文章。四字・六字の対を基調とした技巧的な散文。

↓

古文復興…唐の中期以降に騈儷文に対する批判がおこり、外形的な修辞よりも、内容重視する「古文」を模範にすべきという主張。**「古文復興運動」**という。

【唐宋八大家】…古文復興運動の流れを受けて、名文を生んだ代表的な八人

韓愈（かんゆ）**・柳宗元**（りゅうそうげん）**・欧陽脩**（おうようしゅう）**・蘇洵**（そじゅん）**・蘇軾**（そしょく）**・蘇轍**（そてつ）**・王安石**（おうあんせき）**・曾鞏**（そうきょう）

【韓愈・柳宗元】

・中唐の文章家・詩人

・「韓柳」と並称される

【蘇洵・蘇軾・蘇轍】（父・長男・次男）

・「三蘇」という。

『唐宋八大家文読本』（沈徳潜（しんとくせん））…唐宋八大家の作品を集めて編集。

復習問題　第十二講

①　「為人」はどのような意味か。次の中から最も適切なものを一つ選べ。

ア　性格として　　イ　他人のために　　ウ　大人になって　　エ　わざと

②　「何為以テレ公ヲ名ヅケシト。」の傍線部の意味（訳）を記せ。

③　「猶未二尽除カレ一。」を書き下し文にせよ（送り仮名を省いたところがある）。

④　蘇洵は優れた文章の書き手である「唐宋八大家」の一人とされている。次の人物のうち、「唐宋八大家」に**含まれない**のは誰か、次の中から一つ選べ。

ア　韓愈（かんゆ）　　イ　柳宗元（りゅうそうげん）　　ウ　欧陽脩（おうようしゅう）　　エ　蘇軾（そしょく）

オ　蘇轍（そてつ）　　カ　司馬光（しばこう）　　キ　王安石（おうあんせき）　　ク　曾鞏（そうきょう）

〈 Memo 〉

模範解答

【第一講】

〔模範解答〕

一

問一　三つのお餅のうち、二つは分け合って食べた夫婦が、残りの一つのお餅をかけて、もし言葉を発したならば負けだと決めて、その人には残りの一つのお餅を与えないという約束。

問二　②　もし　　③　まさに～す　　④　すなわち

問三　⑤　なんという愚かな人でしょう、一つのお餅のために盗賊を見てもわざと声をあげないなんて。

⑥　決してお前に（このお餅は）与えない。

問四　こけぼんのうしゅじゅのあくぞくのしんりゃくするところとなる。

問五　小さな名誉や利益のために、現実に起きている不都合なことをわざと見ようともせずに、黙認するような存在。（五十字）

二

問一　身分の低い者ですら嘘をつくことを望まない、ましてや身分の高い者〔＝王〕が嘘をつかないのは当然のことだ。

問二　公主が温達の妻となりたいのならばなればいいということ。

問三　公主が温達の妻になりたいと温達に伝えたこと。

問四　私の息子はとても身分の卑しい者で、高貴な人の夫となるような人間ではありません。

問五　もしお互いに結婚する意志があれば、富貴な者である必要などないということ。

〈現代語訳〉

一

昔、夫婦がいて、三つのお餅を手に入れた。夫婦はお互いに分けて、それぞれ一つずつお餅を食べた。余った一つのお餅があり、お互いに約束をした。もし言葉を発した者がいたら、お餅を与えないことを約束した。そこで約束を実行した。一つのお餅のためにわざと決して話をしなかった。しばらくして盗賊が現れて、（この夫婦の）家に入って盗みをはたらき財産を取った。すべての財産がことごとく盗賊の手に渡ってしまった。夫婦の二人は以前にした約束があるので、（盗賊を）目で見てもわざと何も言わなかった。盗賊は（二人が）何も言わないのを見て、とうとうその夫の前でその妻を奪おうとした。その夫は目で見ても、やはりまた何も言わなかった。妻はそこで盗賊に声をあげた。妻がその夫に言った。（妻が）言うには、「なんという愚かな人でしょう、一つのお餅のために盗賊を見てもわざと声をあげないなんて」と。その夫は手を叩いて笑って言った。「私がお餅を手に入れることが決まった。決してお前に与えない」と。世間の人はこれを聞いて嘲り笑わない人はいなかった。凡夫もまたこのようである。小さな名誉や利益のためにわざと現実をきちんと見ないで黙って何もしないでいれば、いつわりや煩悩などの様々な悪いものに入り込まれてしまうのである。

二

温達は、高句麗国平岡王の時代の人である。破れた上着に履き古した草履で、町中を行き来していた。当時の人はこれを見て「愚温達（愚かな温達）」と思った。平岡王の幼い娘がよく泣いた。王がふざけて言うには、「おまえはいつも泣いて私の耳をうるさくする、おまえを愚温達に嫁がせなければいけない」と。王はいつもこのように言った。娘が十六歳になり、王は高氏に嫁がせようと考えた。王の娘が答えて言うことには、「王はいつもおまえは必ず温達の妻になれとおっしゃった。今どうして前言を覆すのですか。身分の低い者ですら嘘をつくことを望まない、ましてや身分が高い者（＝王）が嘘をつかないのは当然のことだ。だから『王に戯れの言葉はない』と言われています。今大王は命令を誤りました。私は決して謹んでお受けすることはしません。」と。王が怒って言うには、「おまえが嫁ぎたい所にいけばいい」と。そこで王の娘は宮殿を出て一人で行き、温達の家に着いた。目の不自由な年老いた（温達の）母親にお目にかかり、挨拶をして息子の温達がどこ

にいるかを尋ねた。年老いた母が答えて言うことには、「私の息子は空腹に耐えられず、山でニレの樹皮を取っています。しばらく経ちましたがまだ帰ってきません」と。王の娘は出て行き山の麓に着き、温達がニレの樹皮を背負って来るのを見た。王の娘は温達に（自分の）思いを言った。温達は怒って顔色を変えて言うことには、「ここは若い女性が来てよいところではない、（おまえは）絶対人間ではない」と。そのまま行って振り返りもしなかった。王の娘は翌朝改めて（温達の家に）訪ねて、母と息子に詳細を告げた。温達はぐずぐずしてまだ決断できずにいた。温達の母親が言うには、「私の息子はとても身分の卑しい者で、高貴な人の夫となるような人間ではありません。私の家はとても貧しく、もともと身分の高い人が暮らすのにふさわしくありません」と。王の娘が答えて言うには、「昔の人は言いました『一斗の粟でも（臼で）やはりつくことができる、一尺の布でもやはり織ることはできる』と。もしお互いの心が同じであれば、どうして必ずしも富と身分を得た後で一緒になる必要があろうか、いや、そんな必要はない」と。そこで金のうでわを売って、畑、家、牛、馬、家財道具を買って手に入れた。

【第二講】

〔模範解答〕

一

問一 自分の子を先帝の子より重んじるべきではないと考えた明帝のお心とは違ってしまいます。

問二 今、魏徴が正しい道理を引用して、それで主君の私情を抑制したのを見て、そこで魏徴が本当の国家の重臣であることがわかりました。

問三 まして家臣という疎遠な立場で、なんとこのように主君に諫言できたのです。

問四 魏徴が朝廷で毎回諫言して自分に恥をかかせるから。

問五 魏徴が率直に諫言できるということは、君主である太宗が賢明だという証であること。

二

問一 （ア）猶ほ歯の脣有るがごときなり。

（イ）ⓐ＝斉楚　ⓑ＝趙

問二 （ア）趙に穀物を与えることを許可して、そうして秦の軍隊を趙から退却させるに越したことはないです。

（イ）趙を救うことで高く優れた道義を持っているということと、秦の軍隊を退けることによって名声が得られ、強い国力も持っているという評価。

〔現代語訳〕

一

（太宗李世民の娘の）長楽公主が降嫁することになった。太宗は、長楽公主は長孫皇后が生んだ子であったので、特に長楽公主をかわいがり、官吏に勅命を下し送別の金銭を（高祖李淵の娘の）永嘉長公主の倍贈らせることにした。魏徴が諫めて言うことには、「昔、漢の明帝は子供に領地を与えようとして言うには、『我が子がどうして先帝の子と同じだけ手に入れられようか、いや、そういうわけにはいかない』と。全員（の領地を先帝の子である）楚王と淮陽王の半分にさせました。今、長楽公主に永嘉長公主の倍の餞別を贈られることは、（我が子よりも先帝の子を重んじた）明帝のお心に違わないことがありましょうか、いや、違っています」と。太宗はその言葉をその通りだとして、宮中に戻り長孫皇后に告げた。皇后が感動して言うには、「私はしばしば陛下が魏徴を称えて重んじられていることを聞いていましたが、その理由を知りませんでした。今、魏徴が正しい道理（の話）を引用して、それで主君の私情を抑制したのを見て、そこで（やっと）本当の国家の重臣であることがわかりました。私は陛下と結婚して夫婦となり、いろいろと恩寵を受けていますが、（陛下に何かを）申し上げるたびに必ずまず先に（陛下の）顔色を窺い、決して軽々しく（陛下の）威厳をそこねることはしません。ましてや家臣で疎遠でありながら、なんとこのように（陛下に）諫言できたのです。陛下は従わないわけにはいきません」と。そこで（皇后は）天子が派遣した使者を遣わして、銭と衣を魏徴にお与えになるようにお願いした。

太宗が以前朝廷から帰って来て、怒って言うことには、「必ずこの田舎じいさんを殺してやる」と。長孫皇后が誰のことかと尋ねた。太宗が言うには、「魏徴が朝廷にあがるたびに私に恥をかかせる」と。長孫皇后は（太宗の前から）退いて、礼服を着て庭に立った。太宗が驚いてその理由を尋ねた。長孫皇后が言うには、「私が聞いているには君主が賢明であれば家臣は直言する、と。今魏徴が（陛下に）直言するのは、陛下が賢明だからです。私は祝わないでいれようか、いや、お祝いいたします」と。太宗はそこで喜んだ。

二

秦が趙を攻めた。斉と楚が趙を救った。秦が計略を企てて言うことには、「斉と楚が趙を救った。親密になるならば軍隊を（趙から）退却させよう。親密にならないならば、そのまま趙を攻めよう」と。趙は食料が無くなった。穀物を斉に（くれるように）お願いした。斉は許可しなかった。（斉の臣下の）周子が（斉王に）言うことには、「これ〔＝趙に穀物をあげること〕を許可して、そうして秦の軍隊を（趙から）退却させるのに越したことはないです。許可しなければ秦の軍隊は退却しないでしょう。それでは秦の計略が成功して、斉・楚の計略は誤ります。そもそも趙は斉・楚にとっては、自らの身をおおい、敵から守るための防備です。ちょうど歯には唇があるようなものです。唇がなくなれば歯は寒いのです。今、趙が滅亡すれば、将来憂慮することが斉・楚に及ぶでしょう。さらに趙を救う任務は、水が漏れる甕をささげ持って焦げつくかまに水を注ぐようにするのがよいでしょう。そもそも趙を救うことは高潔なる道義（に基づく行為）です。秦の軍隊を退却させるのは名声を高める行為です。道義は滅亡する国を救い、国の威厳は強大な秦の軍隊を退却させます。このことをすることに力を尽くさないで、穀物を惜しむことに力を尽くすのは、国の計略を立てる者の誤りです」と。

【第三講】

〔模範解答〕

一

問一　いまだかつてみづからもつておしへとなさざるなり。

問二　小説の教えが、儒教・仏教・道教よりも広く普及しているということを、小説の教えが士大夫〔＝官吏〕・農民・職人・商人はもちろんのこと、子供や女性、文字の読み書きができない者にまで内容を知られていることを根拠に言っている。

問三　始め…以殺人為好　終わり…狂無所忌憚

問四　どうして気ままに暮らして何の教えも持たない若者で、小説の教えで悪に導かれた者が、鳥獣に近いことを不思議に思うだろうか、いや、不思議に思わない。

問五　人を悪に導く小説が明の時代から儒教・仏教・道教よりも広く普及し、長い期間たくさんの人々に読まれて、自然と人の心や風習に影響を与えてきたから。

二

問一　A＝よく　B＝すなは〔わ〕ち　C＝まさに　F＝ここをもつ〔っ〕て

問二　なんぢなんぞつみをうる（こと）のおほきや（と）。

問三　E＝兵の数が多い相手〔＝多い敵〕に少ない人数では匹敵しないので、きっと成果〔＝功績〕が無く

G＝お前は君主が知る機会を与えず進言しなかった。

問四　世間には季氏のような悪を働く為政者はたくさんいるので、閻魔大王の裁きをあの世で受けたら、季氏以外の多くの為政者も地獄に落とされることになるから。（七十二字）

〔現代語訳〕

一

昔は儒教・仏教・道教の三つの教えがあり、明の時代から以降は、また一つ教えが多く（その教えを）小説という。小説の一形式の書物は、今まで一度も自ら教えと称したことはない。しかし官吏・農民・職人・商人でこれを習慣的に聞いていない者はおらず、子供・女性・字の読み書きができない者に至るまで、また皆が聞いてこれを見たかのようだ。これはその（小説の）教えが儒教・仏教・道教と比べてさらに広まっているということである。仏教・道教でさえ善を人に勧めるが、小説はひたすら悪によって人を導く。道理に反することやみだりに盗むことなど、儒教・仏教・道教の書物がはっきり言うには耐えられないことも、小説は必ずそのありさまを書き尽くして書き窮めて、悦んで口に出して、人を殺すことも立派な男とみなし、女を追い求めることも風流とみなし、本心を失って狂ったようになることも、（書くのを）遠慮することがない。若者で気ままに暮らして教えを持たない者が多い、またこれらの書物が彼らを誘惑することがあれば、どうして若者が鳥獣に近いものとなることを不思議に思うだろうか、いや、思わない。世間の人は習っても研究しようとせず、いつも刑事事件や強盗事件が日に日に増えることを不思議がるが、どうして小説が人の心や風習を損なってきたことが、すでに一朝一夕の短い間の影響ではないことをわかっていようか、いや、わかっていない。

二

斉の宣王の治世に、死んで生き返った人がいて、あの世にいたときの話をすることができた。そこで言った。ちょうどあの世にいたとき、閻魔大王が一人の貴人を詰問していて、「お前はなんと罪を得ることの多いことよ」と言うのを見た。そこで（私はそばにいた者に）尋ねて、「（あの人は）何者ですか」と言った。（その人が）言うには、「魯国の大臣の季氏である」と。その貴人は再三にわたり従おうとしないで言うには、「（私は）無罪です」と。閻魔大王が言うには、「ある年、斉の兵が（魯の国の）国境に侵入したが、おまえはただ一万の兵を派遣して対応させただけであった。（派遣された兵の）みんなが言うには、『大人数に少人数では匹敵しないので、きっと成果がなく、どうして成果がないだけであろうか、きっと人の命をむりやりにそこなうことになる』と。お前は（このときも）また従わなかった。こういうわけで斉の兵が多

く、一万人（の魯の兵）はみんな死んだ。またある年のある日の飢饉のときに、お前は君主が（国の状況を）察知する機会を与えず進言しなかった。そのまま穀物倉庫を開かず、それによって数万人を殺した。さらにお前は大臣として、職務は陰陽の秩序をととのえることであるのに、お前の政治はあるべき道にもとり、たくさんの水害や旱害の年を招き、国民はその被害を被った。これらは全部お前の罪である」と。その貴人は額ずいてようやく従った。閻魔大王が言うには、「最も苦しい地獄に落とせ」と。そこで牛の頭をした数人がいて、その貴人を捕えて去った、と。

艾子はこれを聞き、ため息が止まらなかった。門人が質問して言うには、「先生は季氏と旧交があったのですか。どうして嘆いていらっしゃるのですか」と。艾子が言うには、「私は季氏を嘆いているのではない。思うに閻魔大王を（憐れみ同情して）嘆いているのである」と。門人が言うには、「どういう意味ですか」と。（艾子が）言うには、「これからどうして地獄が空っぽになることがあろうか、いや、ないだろう」と。

【第四講】

〔模範解答〕

一

問一　（1）皆船を以て之を十里の外より〔に〕載す。

（2）全部、船で十里離れた所から役所で使う水を運んできた。

問二　役所の厨房の外にあった一つの水甕を雷が打ち砕き、溜めていた水が流れ出し、甕の外に蛇の抜け殻を見つけた。

問三　だから天が雷で突然蛇の毒が入った水甕を打ち砕いたのは、天が人をとてつもなく愛しているからである。

問四　天

問五　道署の人をして其の害に遭ふを免れしむ。

問六　役所の人々が、飲水用の水甕に蛇が入っていて毒があることに気づいていなかったが、天がそれを悟り、人間を救うために雷で水甕を打ち砕いたことは、天の深い思いやりと鋭い推察力のおかげだと考えたから。（九十五字）

問七　ⓐ＝およそ　ⓑ＝すなわ〔は〕ち　ⓒ＝もっ〔つ〕て　ⓓ＝もとより　ⓔ＝なお〔ほ〕

問八　A＝（ア）　B＝（ケ）　C＝（オ）　D＝（キ）

〔現代語訳〕

一

寧波は、水の（豊かな）国である。しかし甬江の水と海水が混ざりあっており、その（土地の）水はすべて塩辛い。だからすべて淡水を求める者は、（甬江の上流の）鄞江に遡らなければいけない。その源流はやっと清らかである。（寧波の）住民は家ごとに巨大な甕を並べて、雨水を溜めてこれを使用している。私は寧紹台道に赴任して五年、役所で使用する水は、

すべて船で十里離れた所から運んでくる。府や県の役所もまたそのようであった。
丙戌の夏、雷がとどろき、突然役所の厨房の外の一つの水甕を直撃して砕いた。その水甕は水の容量が十余石あったので、勢いよく流れて地面が水浸しになった。（打ち砕かれた）甕の外に八、九尺の蛇の抜け殻が一つあった。
私はそこで悟って言うには、「この甕の水は、役所の人々が、飲食するときにみんなが提供されている。蛇が甕で水浴びし、甕の外に出て行き脱皮した。その水は必ず毒があり、役所の人々が、人を殺してしまう。だから（天が雷で）突然この水甕を打ち砕いたのは、天がとてつもなく人を愛しているからである。淡水はもともと人を養うものである。蛇が最初（この水甕に）入って水浴びをしていることを、人はまだ誰も知らなかった。だが蒼蒼たる者（＝天）は早くもすでにこのことを知り、雷を起こして一撃し、役所の人々にその被害に遭うことを免れるようにしてくれた。ああ、なんとまあ天の仁愛と明察とが広く行き渡っていることだろう」と。

＊**「諸子百家」**の空欄

●儒家…**「孔子」**が祖で、**「仁」**を最も重要と考える。「修己治人（しゅうこちじん）（＝まずは己を修めて、その後に人を治める）」が使命。**「孟子」**や**「荀子」**に受け継がれ、思想が展開されていく。

●道家…**「老子」**が祖で、**「無為自然」**（＝「人為」である知識や道徳などを排除して、自然の本性に従うべき）を主張し、儒家と対立。**「荘子」**などに受け継がれる。「**老荘**思想」ともいう。

●法家…管仲（かんちゅう）が祖で、法律や刑罰を重んじる思想。集大成したのが**「韓非子」**で、「信賞必罰（＝賞すべき者には必ず賞を与え、罰すべき者には必ず罰を与えるべき）」を唱える。

●縦横（じゅうおう）家…**「蘇秦」**が合従（がっしょう）策（＝秦以外の国で連合）、**「張儀」**が連衡（れんこう）策（秦とそれ以外の国を連盟）を唱える。

●兵家…兵法・軍事に関する思想。兵家の書である**『孫子』**が有名。

【第五講】

〔模範解答〕

一

問一　（1）　治さ〔治せ〕ずんば〔ざれば〕将に深からんとす（と）。

（2）　治療をしなければ、患部は深いところに達するでしょう。

問二　医者が利益を好むことといったら、病気ではない者まで治療して手柄を立てようとする。

問三　桓侯人をして其の故を問はしむ。

問四　しめいといえ〔へ〕ども、これをいかんともするなし。

問五　皮膚の下や、血脈、胃腸の病気であれば治療法があったが、骨髄の病気となると、治療法がなくどうすることもできないので、治療を受けるよう求めなかったということ。　（七十七字）

問六　人が気に病むのは、病気が多いことだが、医者が気に病むのは、治療法が少ないことである。

問七　ⓐ＝まみえて　ⓑ＝いい〔ひ〕て　ⓒ＝すでに　ⓓ＝つい〔ひ〕に　ⓔ＝よく

問八　（エ）

問九　A＝（イ）　B＝（カ）　C＝（ケ）　D＝（エ）

〔現代語訳〕

一

扁鵲が斉に立ち寄り、斉の桓侯が彼を食客とした。（扁鵲が）宮殿に入って（桓侯に）お会いして言うことには、「主君は病気をお持ちです、皮膚の下にあります。治療しなければ患部は深いところに達するでしょう」と。桓侯が言うには、「私は病気ではない」と。扁鵲は退出した。桓侯が側近に言うには、「医者が利益を好むことといったら、病気ではない者を治療して手柄を立てようとする」と。五日後、扁鵲がまたお会いして言うには、「主君は病気をお持ちです、血管にあります。治療しなければ（患部は）おそらく深くなるでしょう」と。桓侯が言うには、「私は病気ではない」と。扁鵲が退出した。桓侯は不機嫌だった。五日後、扁鵲はまたお会いして言うには、「主君は病気をお持ちです、腸と胃の間にあります。治療しなければ（患部は）深くなっていくでしょう」と。桓侯は返事をしなかった。扁鵲は退出した。桓侯は不機嫌だった。五日後、扁鵲がまたお会いして、桓侯を遠くから見ただけで退出して逃げた。桓侯は人にその理由を問わせた。扁鵲が言うには、「病気が皮膚の下にあるときは、飲み薬と湿布による治療で治せます。血管にあるときには、針による治療で治せます。腸と胃にあるときは、薬用酒や発酵飲料による治療で治せます。病気が骨髄にあるときは、人間の命をつかさどる神様であっても、病気をどうすることもできません。今、骨髄に病気があります。私はこういう理由で治療をお受けするようには求めませんでした」と。五日後、桓侯は体の具合が悪くなった。人に扁鵲を呼ばせた。扁鵲はすでに逃げ去っていた。桓侯はそのまま死んだ。聖人に病気の徴候を予知させて、良医に早いうちから治療にあたれるようにさせることができれば、病気は治すことができ、体は生きることができるのである。人が気に病むのは、病気が多いことだが、医者が気に病むのは、治療法が少ないことである。

＊「儒家・道家・法家」の空欄

「儒家」

【孔子】

・五常（仁、義、礼、智、信）を重んじており、**「仁」**を最も重要と考えた。

【孟子】

・**「性善説」**（＝人間の本性は**「善」**。仁・義・礼・智を身につければ、聖人や偉人になれる）を説く。

・**「仁」**と**「義」**を重視。

【荀子】

・**「性悪説」**（＝人間の本性は**「悪」**。善に導くためには、学問や礼儀が必要。）を説く。

・**「礼」**を重視。

「道家」

【老子】

・**「無為自然」**…「人為」である知識や道徳などを排除して、自然の本性に従うべきという考え。

「法家」

【韓非子】

・**「信賞必罰」**を唱える。

【第六講】

〔模範解答〕

一

問一　a＝ことごとく　b＝いえ〔へ〕ども　c＝なお〔ほ〕　d＝およそ

問二　在仮旬～皆不得　／　及梁公～遺尽畢

問三　②（1）せいいまだこたう〔ふ〕るにおよばざるに
（2）斉平陽〔斉澣〕がまだお答えしないうちに
④（1）しからばすなわ〔は〕ちつい〔ひ〕にいかん（と）
（2）私が管仲と晏嬰に及ばないならば、結局私はどんな宰相であるのか

問四　（1）イ
（2）管仲、晏嬰が作った法令は、在職中に世に行き渡ったが、姚梁公が作る法令は施行し終わらないうちに改正して世に行き渡らないから。

問五　安定した情勢の治世ではなく、緊急時に対応する能力がある宰相。（三十字）

問六　他のものができないような仕事も短期間で全てやり終えてしまうほど有能で、皇帝からも認められており、自分で自信も持ってはいるが、きちんと分をわきまえてもいて、人の意見も聞ける。臨機応変に処理する能力にたけており、人を見る目も確かな人物。

二

問一　a＝タモタルル　b＝ト　c＝イエ〔ヘ〕ドモ　d＝サキニハ

問二　最初の舟は無人だったが、今の舟には人が乗っているからである。

問三　〔読み〕　たれかよくこれをがいせん（や）。
〔訳〕　誰が自分を虚にした人に害を加えることができようか、いや、できない。

問四　無為自然

〈現代語訳〉

一

姚梁公と崔監司は中書省に在職していた。梁公に息子の葬儀があった。休暇をとること十日、政治の事務の仕事がたまって、処理はすべてなされなかった。（ある人が）玄宗皇帝に（そのことを）言ったところ、玄宗が言うには、「私は天下のことをはじめから姚崇（＝姚梁公）に託しているのだから、あなたはただ座って何もせず、名声や徳望によって上下の人心を従わせればよい」と。梁公が出仕すると、わずかの間で（たまっていた仕事の）処理はことごとく終わった。

ある頃、斉平陽は中書省の属官であったが、（姚梁公の）傍にいて彼を見ていた。梁公は自らを有能とみなし、たいそう得意の様子であった。そこで平陽に質問して言うには、「私は宰相として、どのような人と肩を並べることができるだろうか」と。斉平陽（＝斉澣）がまだお答えしないうちに、梁公が言うには、「管仲、晏嬰と比べるとどうか」と。（斉平陽が）言うには、「管仲、晏嬰に肩を並べることはできません。管仲、晏嬰が作った法令は、後代には行き渡らなかったが、それでも在職中には世に行き渡りました。相公（＝姚梁公）がかつて朝廷に入り宰相となり、作った法令は施行し終わらないうちに、すべて改正されました。このことによって及びません」と。梁公が言うには、「それでは結局どんな宰相であろうか」と。（斉平陽が）言うには、「相公（＝姚梁公）は危急を救う宰相と言うことができます」と。梁公は喜んで筆を投げて言うには、「危急を救う宰相には、どうして簡単になれるものだろうか、いや、なかなかなれない」と。

その当時、斉平陽は現在のことをよく知っており、高仲舒は昔のことをよく知っていた。姚梁公は宰相となり、たいてい疑問をただし難しいことを問うときは、すべてこの二人にした。（姚梁公は）よって感嘆して言うには、「昔のことを知りた

ければ、高仲舒に質問し、今のことを知りたければ、斉滸〔＝斉平陽〕に質問する。そうすれば政治を失敗することはない」と。

二

だから人民を支配する者は（面倒さで）心を苦しめ、人民に利用される者は憂慮するのである。だから堯は人民を支配するのではなく、人民に利用されるのでもなかったのである。私の願いは、あなたの心の苦しみを取り去り、あなたの憂慮を取り除き、そしてただ「道」と一緒に根源的な自由の境地に遊ぶことです。舟を二艘並べて黄河を渡るとして、誰も乗っていない舟があり、（その舟が）来て（自分の）舟にぶつかったならば、たとえ心の狭い人がいたとしても怒らないだろう。一人が舟の上にいたならば、呼んで舟を外に向けたり内に向けたりさせるでしょう。一回呼んで聞き入れず、そうして三回呼ぶことになれば、きっと怒った声で相手に呼びかけるでしょう。前のときは怒らなかったのに、今は怒るのは、前のときには虚〔＝無人〕で今は実〔＝有人〕だからです。人が自分を虚〔＝心を空っぽ〕にして世間で遊ぶことができれば、誰がその人に害を加えることができようか、いや、できない。

【第七講】

〔模範解答〕

一

問一　a＝ひそかに　　b＝すこぶる　　c＝かつて

問二　狄仁傑が婁師徳のおかげで宰相となれたにも関わらず、婁師徳のことを軽んじて朝廷から追い出そうとし、婁師徳はそれを知っても恨んでいないということ。

問三　狄仁傑は則天武后から自分が宰相になれたのは婁師徳の推薦であったという真実を聞かされ、それにも気づかず婁師徳を見下していた自分の行いを恥じたから。

問四　今より某の面に唾する者有りと雖も、亦（た）敢へて言はず

問五　分不相応にも州の長官となった弟が、他人から妬まれて、長官の仕事をきちんとすることができなくなるといけないという心配。

問六　唾を顔面にかけられても笑って吐きかけられるほうがよい。

問七　怠けずに実直に任務をこなし、部下にも丁寧に接することができ、自分が推薦した人物が、自分を退けようと画策しても恨まない器の大きな人物で、州の長官となった弟には、人から妬まれた場合の対処法を的確に助言ができ、万事人と争うことなく、うまく世を渡っていくことができ、死ぬまで名声を保った有能な人物。　（百四十五字）

二

問一　e　　**問二**　3　　**問三**　3

〔現代語訳〕

一

上元の初め、チベットの王国の吐蕃が勢力を増してきたので、詔を出して勇猛な人物を募集してそして吐蕃を討とうとした。婁師徳は監察御子でこの募集に応じた。高宗はとても喜び、朝散大夫を授け、ひたすら辺境の任務を統括させた。四十年ほど、恭しく勤めて部下の者たちに応対し、つとめ励む様子は怠ることがなかった。狄仁傑は宰相となったが、婁師徳がひそかに狄仁傑を推薦したのである。（狄仁傑は婁師徳と）同じ地位になると、ひどく婁師徳を見下し、しばしば婁師徳を外国の使者におしのけようとした。婁師徳はこれを知っていたが恨まなかった。則天武后はこのことに気付き、狄仁傑に質問して言うには、「婁師徳は賢者か」と。（狄仁傑が）答えて言うには、「将軍となって職務を忠実に守っていますが、賢者かどうかは私にはわかりません」と。また（則天武后が狄仁傑に）質問するには、「婁師徳は人（の善し悪し）を見分けることができるか」と。（狄仁傑が）答えて言うには、「私は以前同僚でしたが、まだ婁師徳が人を見分けることができると聞いたことがありません」と。則天武后が言うには、「私があなたを登用したのは、婁師徳が実は推薦したからである、また（あなたを推薦した婁師徳は）人（の善し悪し）を見分けることができると言えるでしょう」と。狄仁傑はひどく恥ずかしく思って（則天武后の前から）退き、歎息して言うには、「婁師徳の大いなる人徳、私はその人徳に包まれていたが、その人徳の際限をうかがい知ることができなかった」と。朝廷が乱れた時代にあって、命を失ってほろびる者は絶えることがなかったが、婁師徳は功績と名声を死ぬまで保ち、見識のある人物は婁師徳を立派な人物だと評価している。さて、婁師徳が朝廷にいたとき、彼の弟が優秀ということで代州都督に任命された。（弟が任地に）出発しようとすると、（婁師徳が）弟に言うことには、「私は若くて才能がなかったが、宰相の地位に立っている。お前が今また州の長官に就き、かたじけなくも分不相応の地位に就くことは、人々が妬むことである。いったいどのようにして職務を全うしようとしているのか」と。弟が答えて言うには、「これからは私の顔に唾を吐く者がいても、決して何も言わないで、ただ自分で顔を拭うだけにすれば、兄の心配にはならないでしょう」と。婁師徳が言うには、「これがまさに私の心配となるのだ。そもそも唾を吐く者は、怒りを覚えたからである。お前がもし唾を拭ったならば、それはその人の怒りに逆らうことになってしまう。唾は拭かなくても自然と乾くだろう、笑って唾を吐きかけられるのとどちらがよいか、笑って唾を受け止めるほうがよい」と。弟が言うには「謹

んで教えを守ります」と。婁師徳が人と競争しないことは、すべてこのようである。

二

皇帝の尭陶唐氏は、（略）帝嚳の子である。その仁愛は天のよう（に広大）で、その知恵は神のようだ。近づけば太陽のよう（に温かな人）で、遠くから見ると（恵みの雨に満ちている）雲のようだ〔＝慈愛に満ちた人物である〕。平陽を都とした。宮殿のかやぶき屋根は（端を）切りそろえておらず、土で作った階段は三段だけ（の質素なもの）であった。（略）（尭が）天下を治めて五十年。天下が（無事平安に）治まっているのか、治まっていないのか、人民が自分を皇帝にしたいと願っているのか、自分を皇帝にしたいと願っていないのかがわからなかった。側近に問うても、（側近には）わからない。役人に問うても、（役人も）わからない。民間の人に問うても、（民間人にも）わからない。そこで目立たない服装で大通りに出歩いてみた。（そして尭は）童謡を聞いた。（その童謡に）言うには、「われわれ万民が生活できるのは、すべてあなたの強い力（のおかげ）です。知らず知らずのうちに、皇帝の決まりに従っている」と。老人がいて、物を食べてお腹を叩き、足で地面を踏み鳴らして歌うことには、「太陽が昇れば耕作し、太陽が沈めば休む。井戸を掘って（水を）飲み、田を耕して食べる。皇帝の力は私には何の関係もない」と。

【第八講】

〔模範解答〕

一

問一　a＝あに　b＝また　c＝あへて

問二　（ア）成之〔徐守誠〕　（イ）郷里の（多くの）人々

（ウ）懸命に学問に励むことを役立たずだと誹り笑うことに対して、自分の姿勢を全く変えなかったということ

問三　尚ほ未だ成之の得難きこと此くのごときを知らざるなり。

問四　急激に切迫して学問を求めようとすると、かえって個人的な思惑にとらわれてしまう。

問五　成之が、学問を体得した境地に達したとしても、力が入り過ぎて、また緊張して心を奮い起こしてその状態に満足できないのではないだろうかという心配。

問六　成之が郷里で学問に励んでいることは素晴らしいが、激しすぎる傾向がある。学問の努力を怠ることはできないが、急激に学問を求めると、かえって個人的な思惑にとらわれてしまうので、常に誠意を持って学び続け、正しい道理が自然と熟すれば、深く学問に達することができる。よって、無理に助長すべきではない。（百四十四字）

二

問一　e　**問二**　c　**問三**　a　**問四**　c

問五　c　**問六**　a　**問七**　d　**問八**　a＝孔子　b＝丘　c＝儒家

〔現代語訳〕

一

人が精神的道義を好むことを失ったことから、仁を体得することが難しくなって久しい。先ごろ私と同郷の篤学の青年の成之は郷里にいて、刻苦勉励し立派な人物になったが、郷里のみんなが誹り笑って迂遠で役立たずだとみなした。成之はそのために少しも変わることがなかった。私は当時少しずつ敬愛しはじめていたので、みなと一緒に誹り笑うことはしなかったが、だが、やはりまだ成之が得難い人物であるのがこのようだとまではわかっていなかった。今は成之が得難い人物であることはわかっているが、それでも朝晩一緒に過ごすことはできない。なんと大いに残念なことではないか。自己の修養と人々を治めることは、もともと別々のものではない。政治は（変化の）激しいものであるが、また（政治は）すべて学問を実践する現場である。実に成之ならば（政治の）随所で（学問的に）得ることがあるだろう。しかしどのようにして一度筋の通った議論を聞いて、平凡で卑近な見解を洗い流すことができようか。残念だなあ、（成之の学問を）助ける者がいないのは。この頃、成之のために思うのだが、学問を進めようとする努力が、少し激しすぎると感じている。昔の儒学者が言うように学問に打ち込む懇切丁寧というのは、もとより誠意である。しかしながら急激に切迫して学問を求めようとすると、かえって個人的な思惑にとらわれてしまうと。（この言葉を）深く考察するべきである。日常にあるもの、（それらはすべて）天道があまねく行き渡ったものである。ただこの心〔＝学問を志す気持ち〕を常に保って放縦にならないようにすれば、正しい筋道が自然と熟成されるのだ。孟子が言うように「忘れるな、効果を上げるべく無理に助長するな」である。深く達して自然と体得するものなのだ。（だからといって）学問の努力は、どうして緩めることができようか、いや、できない。ただ意識しすぎて力が入ってしまい緊張を持続して心を奮い起しすぎるのを（私は）心配するのだ。（頑張りすぎると）たとえ学問を体得した境地に達しても、きっと（その状態に）満足することができない（ことを、私は心配する）のだ。成之の学問は、（私が）思うにまさにこのようなものではないが、私が見るところによると、これに近いものを感じるのである。こういう訳で（成之にどうしても忠告の言葉を言い）尽くさないわけにはいかない。

二

A　司馬牛が（孔子に）仁について質問した。孔子が言うには、「仁徳のある者は言葉をひかえる」と。（司馬牛がまた）言うには、「言葉がひかえめであれば、それを仁というのでしょうか」と。孔子が言うには、「仁を実践することは難しい。ものを言うことをひかえないでおれようか」と。

B　訒は我慢することであり、迂闊にしないことである。仁徳のある者は心の中に（本心を）とどめて思うとおりにしようとせず、よってその言葉は我慢することがあるようで簡単に発しない。思うにそれは仁という徳へと至る糸口の一つである。先生（＝孔子）は司馬牛が言葉が多くて騒々しいので、だから司馬牛にこのように告げたのだ。司馬牛が思うには仁の道はとても偉大で、ただ先生が言うような（言葉をひかえめにするだけの）ものではないと。だから先生はさらに司馬牛にこのように告げた。思うに（仁徳のある者は）心を常に保っていて、だから何事もいいかげんにはしない。何事も軽々しく行わないので、自然と言葉も軽率ではないようになるのである。

C　仁徳のある者はひたすら実践に努めて、簡単に物事をなさない。だからその言葉はひかえめでないことはできない。もし仮にその言葉を簡単に発したならば、徳にたどりつく手段がなくなる。

【第九講】

〔模範解答〕

一

問一　イ　問二　エ　問三　イ　問四　ア　問五　イ
問六　ア　問七　ウ　問八　ウ　問九　イ　問十　ウ

二

問一　c・e　問二　a　問三　1＝d　3＝c　問四　2＝a　7＝d
問五　4＝a　6＝c　問六　c　問七　c　問八　a・e
問九　a＝Q　b＝Q　c＝O　d＝P　e＝O

※問七に関して。正しい書き下し文は「唯だ当に欲に任せ事を待つべきのみ。」ですが、この選択肢の中から選ぶのであれば、Cが妥当と判断する。

〔現代語訳〕

一

永和九年、癸丑の年。暮春の月〔＝三月〕の上旬の頃、会稽の山陰の蘭亭に集まり、三月三日の禊の行事を行うのである。賢人たちが皆至り、老いた者も若い者も皆集まった。この地には高い山や険しい峰、茂った林や長く伸びた竹がある。また清流や急流もあって、辺りに映えている。（川の水を）引いて盃を流す曲がりくねった流れとし、順番に座る。弦楽器や管楽器のにぎやかな音楽はないけれど、酒を飲みつつ詩文を詠めば、また深遠で高雅な思いを存分に述べることができる。この日、天は晴れて空気は清く、おだやかな風がのどかである。仰いで天空の大きな様子を見、うつむいて万物の盛んな様子

を察知する。ものを眺めて想いを巡らせる手段であり、それによって見たり聴いたりする楽しみを極めることができるのは、真に楽しむべきである。そもそも人が同じ時代に生きていると、あるいは心に抱く思いを表出して、一室の中で向かい合って語ったり、あるいは自らが託するものに任せたりして、肉体を忘れて心を自由に遊ばせる。人生の過ごし方もさまざまで、静かな人もいればにぎやかな人もいて同じではないが、その（自分の置かれた）境遇を喜び、しばらく自分を得ると、気持ちがよく自分で満足し、老いが我が身にやがて訪れることも忘れている。行く〔＝人生を過ごす〕ことに既に疲れ、気持ちが物事によって変化すると、感慨がまとわりつく。さっき喜んでいた事は、つかの間のうちに、既に過去の事となる。そのために人の心に感慨を生じさせずにはおかない。ましてや寿命の長短は天地万物の変化に従い、最終的には死ぬに決まっていることは言うまでもない。古人が言うには、生死もまた大問題だと。（死は）何とも痛ましいことではないか。昔の人の感慨をもよおした理由（を述べた文章）を見るたびに、割り符が合うよう〔＝自分とぴったり〕だ。古人が残した文を前に痛み嘆かずにはいられないが、その理由を我が心にもさとすことができない。もともとわかっている、生と死を同一視することはいつわりであり、長寿と夭逝とを同じだと考えるのはいい加減なつくりごとであると。後代（の人）が現代（の人）を見るのも、また現代（の人）が過去（の人）を見るのとちょうど同じようなのだ。悲しいことよ。だから、この日、蘭亭に集まった人々の名を列挙して、彼らの作った作品を収録する。時代が違い事物が異なったとしても、感慨をもよおす理由は同じなのである。後代の読む者も、またこの文〔＝この日、蘭亭に集まった人々が作った詩文〕に感慨を抱くであろう。

二

　そもそも万物生成の根源の気を含んで生命が生存するならば、認識が存在しないことはなく、認識が存在して行為があるならば、行為の善悪に応じてその報いを受ける。農夫が種をまき苗を植えて、植えた場所に応じてこれを収穫するかのようだ。このことは思うにものの一定不変の法則であり、本来疑うことのできないものである。最上の賢者はその根本原理に通達しているので、（真理を）理解して誤った見解がなく、最低の愚者はその人自身の行動のあとに通じておらず、迷って戻って来ない〔＝真理に到達できない〕というのは、すべてこの上なく優れた言葉である。中間に位置する人は、まだ自分では

（真理に）通達できないので、きっかけに応じて認識作用一般を揺れ動かし、とうとうその認識作用一般が（真理への）疑いを生み出す。疑いと誤った見解とは複雑多岐であるから、それぞれに異なった（考え）を抱く。仏典を手に取りその考えを区分すると、全部で六十二の異端の説がある。間違った考えはかえってこういうところから生まれてくるものなのである。

私〔＝唐臨〕は、中間の人の末席にいる。幸いにも（真理のうち）ほんの少しを悟った。近頃多くの人々で因果を信じない者を見ると（それらの人々の）見解は多いが、同じように善悪の行為に（応じた）報いはないと言う。報いがないという主張には、おおむね三種類がある。一つ目は自然説〔＝人は思うがままに振舞うのが正しい〕。だから因果（応報）はない。ただ当然欲望に任せて事物に対応するだけである。二つ目は滅尽説。言わんとするところは、死んで身体がなくなれば、認識が宿るところもなくなる。身体と認識とがすべてなくなれば、誰が苦楽を受けようか、いや、受けない。受ける者がないことから、因果（応報）がないことが分かる。三つ目は無報説。言わんとするところは、今（の世）の人を見ていても道徳を修めていても、貧困で身分が低ければ早死にし、ある者は凶悪を行っても、富裕で身分が高ければ幸福が長く続くのである。こうした事情から、因果（応報）がないことが分かる。

私〔＝唐臨〕が個人的に思うことだが、儒家の書物は善悪の報いを論じることが非常に多い。近いものは（行為を行った）その時に報いがあり、中間であるものは年を積み重ねた後に報いがあり、遠いものはその子孫に報いがある。

【第十講】

〔模範解答〕

一

問一　A＝ケ　B＝ク　C＝ウ　D＝エ

問二　風が枯れ木に吹きかかり（ザワザワ鳴る音が）、晴れているのに降っている雨の音のようである。

問三　よくこう〔かう〕ろうにつきてしょをけすやいなや

問四　作者は水辺の避暑地を訪れていて、広大な自然を眺め、夜の街の灯りや天の川、月明かりの美しい様子を伝えて、友人に暑苦しい部屋の中にいるよりも、涼みに来ることを誘っている。

二

問一　雪珠如ク㆑豆ノ打チ㆓茅茨ヲ㆒

問二　年老いた自分の丈にちょうどぴったりである。

問三　エ

問四　（１）あんしいず〔づ〕くんぞれいをしらん（や）（と）。
（２）晏子がどうして礼を知っているといえようか、いや、いえない。

問五　ア

問六　国が贅沢になっている時は、倹約を示すことが礼であると考えるから。

問七　倹約だけでなく、狐裘を贈ってくれた人への感謝の気持ちを表すために、大切に使い続けたと考えている。（四十八字）

〔現代語訳〕

一

海の水平線のかなたを東に見ると、薄暗い夜の景色が広々と果てしなく広がっている
山の姿も川の形も、広くかつ長くつながっている
灯が多くの家々に灯り、街の四辺にまでも広がり
天の川が一筋に、川の真ん中にかかっている
風は枯れ木に吹きかかり、晴れているのに降っている雨の音のようである
月は砂を照らし出し、夏の夜の霜のように白く光っている
水辺の高楼に来て、暑さを忘れてみないか
君の粗末な家に比べれば、とても涼しいよ

二

（A）あられが豆のようにかやぶきの屋根を打ちつけ、
我が弟が皮ごろもを贈ってくれたのは、この（ような小雪の）時であった。
リスの毛でできた皮ごろもは毛がふさふさとしていて、本当に珍重すべきで、
年老いた自分の丈にちょうどぴったりである。
ちょっと試着をしてみて妻子に見せてみたが、
身に着けた皮ごろもの温もりが伝わって、手や足の先まで温かくなるのが分かる。
ただ願うことは（弟の）たくさんの愛情がこめられているので、晏嬰〔＝晏子〕のように
一度（この）服をはおれば、そのまま三十年間使い続けることを。

（Ｂ）　曾子が言うには、「晏子は礼法を知っているということができるのである。慎みと敬いの心があるのだ」と。有若が言うには、「晏子は一枚の狐の毛でできた皮ごろもを三十年（も着続け）、送葬の時に供物を載せる車は一台で、墓に着いたら（客を送り出す前に）帰りました。君主は（葬儀では）供物を七個、送葬の時の車は七台。官吏は（葬儀では）供物を五個、送葬の時の車は五台（と決まっているのに）、晏子は（そうした決まりを守らず倹約したので）どうして礼を知っているといえようか、いや、いえない」と。曾子が言うには、「国に正しい道が行われていない時は、君子は礼法を充分に行うのを恥じるものである。国が贅沢になっていれば、人々に倹約を示し、国が倹約していれば、人々に礼法を示すものなのだ」と。

＊空欄補充

「**盛唐**の詩人」

【李白】

・字＝太白（たいはく）。

・「**詩仙**」と称される。

【杜甫】

・「**詩聖**」と称される。

・玄宗皇帝に認められるものの、左遷され、その後は不遇。

「中唐の詩人」

【白居易】

・字＝楽天。

・**『長恨歌』**（←玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋が題材）・**『白氏文集』**が代表作品。

【第十一講】

〈模範解答〉

一

問一　(1) ふ〔つま〕をいましめてもとむる（こと）なからしむ。

(2) いずくんぞまずしから〔ひんなら〕ざるをえん（や）（と）。

問二　(a) どうしてすすんでまだ読んだことのない書物を貸してくれようか、いや、貸してくれない。

(b) 写す前の書物と自分が写した後の書物では間違っていることも多く、いまだにその書物を貸すべきかどうか思い悩んでいる。

問三　書物を人に貸すのも、借りて返却するのも愚かな事だという意味。（三十字）

問四　物は価値を理解してくれる人のもとで、大切にされることが最も大事であるという考え。（四十字）

問五　(i) 周煇と唐子西（順不同）

(ii) 物は、それを本当に必要として大切にする人と共有すべきで、物に執着すべきではないと考えている点。（四十七字）

〈現代語訳〉

一

「書物を貸すにも一つの酒瓶、書物を返却するにも一つの酒瓶」、その後に（「瓻」と発音が似ていることから）間違って（「瓻（＝酒瓶）」が）「痴」の字となってしまったのは、とりわけ（書物を貸し借りする人々の）真心や親切な気持ちを損なうものになる。書物は天から降ってきたり地下から湧き出てくるものではなく、必ず人によって書物を入手し、入手してもこれ

を秘蔵して、自分から多くの人に見せようとしないならば、他人もまたどうしてすすんでまだ読んだことのない書物を貸してくれようか、いや、貸してくれない。唐の杜暹の蔵書には、その末尾に杜暹本人の言葉が記されている、「（この書物は）俸給で買い求め私自身が校定したものである。子孫はこの書物を読んで聖人の道を理解しなさい。（この書物を）売ったり人に貸したりすることは親不孝者とする」と。売った者を親不孝者とするのは、よいだろう。人に貸した者も親不孝者とするのは、言い過ぎである。しかし、私が自分で書物を書き写して、（写した）前と後とで間違っていることも多く、いまだに心に往き来するものがあるのを止められない〔＝そんな書物を貸すべきかどうか思い悩む〕。唐子西の『失茶具説』を読んだことで、迷いが解けて心がさっぱりして、もうわだかまりはなくなった。唐子西の説に言うには、「我が家の茶道具がなくなり、妻には（茶道具を）探さないように忠告した。妻が言うには『どうしてですか』と。私が妻に答えて言うには『茶道具を盗んだ者は、必ずその茶道具を気に入ったからである。気に入ったので、茶道具を手に入れたいと思い、私がその茶道具を惜しんで与え（てくれ）ないのを心配し、そこで茶道具を盗んだのである、こうしてその人は、自分の気に入った物を手に入れたのである。気に入った物を手に入れたならば、それを宝物とし、盗んだことが世の中に知られることを懸念してそれを秘蔵し、それが壊れることを心配してそれを大切に保管する、こうしてこの物は、保管されるにふさわしい場所を手に入れたのである。人は気に入った物を手に入れ、物も保管されるにふさわしい場所を手に入れた、もう何も言うことはないではないか』と。妻が言うには『ああ、これではどうして貧乏でないことがあろうか、いや、貧乏にしかならない』と」。私もまたそのよう〔＝唐子西と同じ〕である。

【第十二講】

〔模範解答〕

一

問一　（1）ときにいまだことごとくはりょうせずといえども

（2）すなわちよくこれをなす〔つくる〕

問二　（a）なんと運命ではないか。

（b）序文を書くことを依頼された。

問三　もし彼らも人であるならば、どうして私が知ることが不都合だろうか、いや、不都合はない。

問四　幼少期に、先生から范仲淹の偉大さを聞き、後に墓碑を読んでその人柄をさらに深く理解できた。（四十四字）

問五　序文に自分の名前を出せば、范仲淹の弟子になるという願いが叶うから。（三十三字）

〔現代語訳〕

一

慶暦三年、私〔＝蘇軾〕は幼年の頃、初めて地方の学校に入学した。都から来た男性がいて、山東省の石守道〔＝石介〕が作った『慶暦聖徳』の詩を学校の先生に見せていた。私は側で（その詩を）こっそり見て、その詩を繰り返し読み暗唱することができ、先生に「（この詩で）ほめたたえられている十一人の人は、どんな人ですか」と質問した。先生が言うには、「子どもなのにどうして彼らを知りたがるのか」と。私が言うには、「彼らが天上界の人ならば、決して知ろうとは思いません。もし彼らも人であるならば、どうして私が知ることが不都合だろうか、いや、不都合はない」と。先生は私の発言を優れているとして、十一人全員の名前を（私に）告げ、さらに言うには、「韓琦・范仲淹・富弼・欧陽脩、この四人は、特に

優れた人物である」と。その時まだ（十一人）すべてを理解しえたわけではなかったが、個人的に心にしっかりとこの四人を刻んだのである。嘉祐二年、初めて科挙に合格して、都に行くと、范公〔＝范仲淹〕は亡くなっていた。すでに埋葬されていて墓碑ができあがっていた。（私は）墓碑を読み、涙を流して、言うには、「私は范公の人柄が分かった。思うに十五年の間に一度も范公と会うことがなかった、なんと（悲しい）運命ではないか」と。この年、試験に合格し、初めて欧陽公〔＝欧陽脩〕の知遇を得た。欧陽公の紹介で韓琦・富弼と面会すると、彼らは一国の中で最も優れた人物として私を応対し、言うことには、「あなたが范文正公〔＝范仲淹〕に会えなかったことが残念だ」と。それから三年後、許州に立ち寄った時、初めて范仲淹の次男で宰相の范純仁と知り合った。また六年して、初めて范仲淹の三男の范純礼と都で会った。また十一年して、とうとう范仲淹の末子の范純粋と徐州で同僚になった。彼らとは出会ってすぐに旧知の仲のようになった。さらに范公の遺稿について、序文を書くことを依頼された。また十三年して、ようやく序文を作成することができた。ああ、范公の功績と徳行は、思うに文字にあらわさなくとも顕彰され、范公の文章もまた序文がなくとも（世の中に）伝わるであろう。しかし（序文を作ることを）決して辞退しなかったのは、八歳で范公を敬愛しはじめてから、今に至るまで四十七年。（八歳の頃に聞いた四人のうち）あの三人の優れた人物とは、交遊することができたが、范公にだけ会うことができず、常々残念であった。もし范公の文集の序文に自分の名前を出して、自分を（范公の）門下の末席に置くことができたならば、なんと長年の願いが叶うことになるではないか。

復習問題解答解説

復習問題解答解説　第一講

〔解説〕

① 「若」にはたくさんの読み方があるが、文頭にあり下から返らない場合は「もシ」と読み、仮定の意味。下から返らないものとして、二人称の「なんぢ」もあるが、問題になっている場合はほとんど「もシ」である。ここでは問題文に「接続詞」とあるので、文脈判断するまでもなく「もシ」である。解答は「平仮名で」とあるので「もし」。

② 「故」の読み方も本講で学習した通り、いろいろあるので押さえておくこと。「如ㇾ故」は「もとノごとシ」。解答表記の指定を守るように気をつけること（以下同様）。

③ 「速」を「すみやかに」と副詞で読んでいるので、上の「宜」が再読文字、下の「出」が動詞と判断できる。それがわかれば、「宜」＝「よろシク～ベシ」、「出」＝「いづ」で、「べし」は終止形接続であるから「いづべし」となる。

④ レ点が付いているので親切だが、「無」、「所」、「（助動詞の）可」は、すべて返読文字で下から返って読む。助動詞「可」は「ベシ」と読み、「べし」は終止形接続。「用」は動詞で、ワ行上一段動詞「もちゐる」でも、ハ行上二段動詞「もちふ」でもどちらでもよい。「所」は（活用する語であれば）連体形接続であるので「べし」は「べき」にする。あとは、それを繋げて読めばよい。

⑤ 「為N所V」は、「NノVスルところトなル」と読み、「NにVされる」と訳す受身の句法。その部分を直訳すると「人情に思い悩まれる・憎悪される」ですが、わかりやすく意訳すると「人の心にやっかいと思われる」、「人から嫌がられる」ということ（同じ意味が読み取れれば、一字一句同じ訳でなくても構いません）。

〔解答〕

① もし　② もとのごとし　③ A＝よろしく　B＝いづべし

④ もちゐるべきところなし。〔もちふべきところなし。〕

⑤ はじめて人から嫌がられていたことを知る。

復習問題解答解説　第二講

〔解説〕

① 最後の「可」の送り仮名に「ヲヤ」が含まれていることに気づけば、「況んや」の抑揚形だとわかる。よって、エが正解。

② 「難Ｖ」は返読文字で「Ｖ（し）難シ」、「不如～」は「～ニ如カず」と読む比較形。よって、両方満たしているウが正解。

③ 「将」が問われていれば、まず再読文字「将ニ～（ント）す」から考えるのがコツ。直後の「撃」が動詞であることから、「将」を再読文字だと捉えて、文脈上（かまきりが、足をふり上げて、今にも（荘公の車の）車輪に打ちかかろうとしている）も問題ない。「撃」の後ろの「其輪」は目的語。「～ントす」の「ン」は、古文の「む」で未然形接続であるので、「撃」は「うた」と活用させる。

④ 「於」が動詞「請フ」よりも下にあるので、この「於」は「置き字」。「請粟於斉」を「Ｖ二Ｏ於Ｃ一」に当てはめて、送り仮名をそれぞれ適宜ふると「粟**を**斉**に**請ふ」となる。

⑤ 「於」が述部「捍蔽也。」の上にあるので、「於」の直後の名詞「斉楚」から返って「於ケル（ヤ）」と読み、ここでは「～にとって」の意味になる。よって、「趙は斉・楚にとって（は）」という訳になる。

〔解答〕

① エ　② ウ　③ まさにそのりんをうたんとす。

④ 粟を斉に請ふ。　⑤ 趙は斉・楚にとって（は）

復習問題解答解説　第三講

〈解説〉

① 動詞「来」の上にあるので、「方」は副詞で「まさニ」と読む。

② 「何謂也」は「なんノいひゾや」と読み、「どういう意味か」と意味を問う決まり文句。

③ 「是以」は「ここヲもつテ」と読み、「だから・こういうわけで」という意味。「不敢～」は「あへテ～ず」と読み、「決して～ない」という意味。文末の「也」は、上に疑問・反語を表す言葉がないので、断定の「なり」。よって、「なり」の直前の「ず」は、連体形の「ざる」にする。「当」が問題になっていれば、再読文字の「まさニ～ベシ」の可能性が高いが、ここは下に動詞がなく、この「当」が動詞「当たる」である。すべて繋げると、「ここをもってあえてあたらざるなり」（現代仮名遣い）。仮名遣いは問わないということなので、解答の歴史的仮名遣いでも可。「こういうわけで決して当たらないのである」という意味。

④ 「安～乎」は反語であるから「いづくンゾ～（未然形＋ン）や」。「有～者」は「～者有リ」と読む場合が多い。その「～」の中では「取」が動詞なので、その下の「人之駒」が目的語。すべて繋げると「いづくんぞひとのくをとるものあらんや」となる。「どうして他人の子馬を奪い取る者がいようか、いや、いない」という意味。

⑤ 「V以A」は「VスルニAヲもつテス」と読み、「VするのにAを用いる・AによってVする・AをVする」という意味。よって、「告以善」は「告(つ)ぐるに善(ぜん)を以(もつ)てす」と読む。「楽」が動詞であるから、その下の「告以善」は目的語となり、「～以てするを」という読みにする（助詞「を」の接続は連体形）。「孰」が反語であるならば、文末の「哉」は「～（未然形＋ン）や」と読む。すべて繋げると「つぐるにぜんをもってするをたのしまざらんや」となる。「（いったい誰が）善行を口に

するのを楽しまないことがあろうか、いや、楽しむ」という意味。

〔解答〕

①　まさに　②　どういう意味か。　③　ここをもつ〔っ〕てあへ〔え〕てあたらざるなり。

④　いづくんぞひとのくをとるものあらんや。　⑤　つぐるにぜんをもつてするをたのしまざらんや。

復習問題解答解説　第四講

〔解説〕

① 「凡」は副詞で「およソ」と読む。

② 「すなはチ」と読む字として、「則・即・便・乃・輒」は押さえておくこと。

③ 「固」は副詞で「もとヨリ」と読む。

④ 「使」を使役の助動詞だと予測して、下をざっと見て動詞を探す。ここでは「図」が「図（えが）く」という動詞。よって、その間の「画工」が使役の対象で、読む場合は「～ヲシテ」の送り仮名が必要。「図」の下の「其形」が目的語。読み方は「画工をして其の形を図かしむ」。これで訳もおかしくないので、その通りに返り点を付けると、解答のようになる。

⑤ 「何其Ａ也」は、「なんゾそレＡや」と読み、「なんとＡではないか」という詠嘆形。よって「何ぞ其れ深きや」と読み、「なんと深いではないか」という意味。深いということに対する詠嘆の意が読み取れる訳であればよい。

⑥ 老子は「道家」の代表的思想家。よって、イが正解。道家の思想家には他に荘子などがいる。

〔解答〕

① およそ　② すなわち　③ もとより

④ 使㆔画工図㆓其形㆒。　⑤ なんと深いことでしょう。　⑥ イ

復習問題解答解説　第五講

〔解説〕

① 「謂」は「いフ」。ここでは「曰く」に続いているので、「謂(い)ひて曰(いは)く」。

② 「能」は、肯定文なら「よク」と読み、「できる」という可能の意味。ちなみに、「不能」は「あたハず」と読み、「できない」という意味。

③ 「寡人」は「徳の少ない人」という意味から転じて、「諸侯・王の自称（謙遜表現）」を表す言葉。この会話文の直前に「光通が怒って言うことには」とあるから、これを話しているのは「光通」。よって、その他は読まずとも、イが正解だとわかる。

④ 主語は直前の数台の車。「将」は、動詞「出」の上にあるので再読文字「将(まさ)ニ～（ント）す」と考えられる。動詞「出」の下の「長夏門」は目的語。「出」はダ行下二段動詞「出づ」。「未然形＋ントす」なので、「出で」と活用させる。よって、すべて繋げると「将に長夏門を出でんとす」となる。

⑤ 「仲尼」とは、孔子の字(あざな)である。ちなみに、名は丘(きゅう)。

⑥ 『史記』の著者は文学史で頻出。ウの司馬遷である。過去に記述で書かせた大学もあるので、文学史が必要な人は書けるようにしておくこと。ちなみに、アの曾先之は『十八史略』、イの陳寿は『三国志』、エの陶潜（＝陶淵明）は『桃花源の記』、オの劉向は『戦国策』の著者である。

〔解答〕

①　いひて〔いいて〕　②　よく　③　イ

④　将に長夏門を出でんとす。　⑤　孔子　⑥　ウ

復習問題解答解説　第六講

〔解説〕

① 訓点が付いているので、とても簡単。これは確実にできてほしい問題。「雖」は「いえどモ」、「能」は「よク」。これらは頻出の読み問題。文末の「乎」は、直前が「ん」であることから「や」とわかる。

② 「被Ｖ」は受身の句法。「被」は、Ｖが四段動詞なら「る」、それ以外は「らる」と読む。ここでは「徙」が「うつす」と読む四段動詞であることから、「被徙」は「うつさる」と読む。したがって、アかオに絞る。オは、「被」を「かふむり」と「る」と重複して読んでいるため不可。よって、アが正解。

③ 「如［目的語］何」は、「［目的語］ヲいかんセン」と読み、「［目的語］をどうすればよいか」という意味。よって、「わがたみをいかんせん」と読む。「私の民をどうすればよいか」という意味。

④ 「与リハ二其ノＡ（セ）ン一孰-若レゾ二Ｂ（スル）ニ一」は、「Ａ（する）よりＢ（する）のほうがよい」という意味。ちなみに「鬼（き）」は漢文では重要単語で、「人間の霊魂・死者」という意味。ここでは、選択形の句法の確認がメインであるため注釈に載せたが、「鬼」の意味は覚えておこう。

〔解答〕

① けんなりといえどもそれよくおこなわれんや。　② ア　③ わがたみをいかんせん。

④ 草木と同じように朽ち果てるより、方孝孺の関係者として共に忠義のために死ぬほうがよい。

復習問題解答解説　第七講

〔解説〕

①　「頗」は、主語「張」と動詞「異トス」の間にあることから副詞で、「すこぶル」と読む。

②　「嘗」は、動詞「有」の上にあるので、副詞で「かつテ」と読む（名詞で「秋の収穫祭」という意味もあるが、文脈から考えられない）。「嘗」の読みを問われたならば、副詞「かつテ」から考えるのがコツ（名詞の意味は覚えておく必要はない）。ちなみに、動詞で「なメル・なム」という読みもある。こちらは「臥薪嘗胆（＝薪の上に寝て、肝をなめたりして、復讐するために屈辱の思いを忘れまいと辛苦して自らを励ますこと）」という四字熟語で覚えておくとよい。

③　第四講でも学習したが、再読文字以外の用法の「将」として、「いったい（どうして〜であろうか）」という反語を強める用法の副詞「はタ」がある。「安（いづ）ンゾ〜ン」は反語である。

④　二重否定「莫非〜」は、「〜でないものはない・皆〜だ」と訳す。よって、傍線部は「王土に非（あら）ざるは莫（な）し」と読み、訳は「（広大な天の下は）王の土地でない所はない」となる。「全部、王の土地だ」なども可。

〔解答〕

①　すこぶる　②　かつて　③　いったいどうして得られようか、いや、得られない。

④　王の土地でない所はない

復習問題解答解説　第八講

〔解説〕

① 「亦」は副詞で「まタ」と読む。

② 「不能」の読みは「あたハず」。「できない」という意味。読みが頻出。

③ 返り点を間違えた人は、解答をよく確認すること。「不敢不～」は「どうしても～しないわけにはいかない」という意味。これを丸暗記しなくても、「不敢～」が「決して～ない」、「不～」が「～しない」、否定は「下を否定する」ということから、「～しないことは決してない➡どうしても～しないわけにはいかない」と、直訳からわかる。

〔解答〕

① また　② あたはず〔あたわず〕

③ 不二敢不一レ拜。

〔現代語訳〕どうしてもお辞儀をしないわけにはいかない。

復習問題解答解説　第九講

〈解説〉

① 「与」の読み方はたくさんあるが、「相与」の場合は「あヒともニ」と読み、「互いに・共に」の意味。

② 「少」は（単独では）「わかシ」と読み、「若い・年少」の意味（ここでは「少長（しょうちょう）」）。傍線部の「少長」が「年少・年配の者」、「愚智」が「愚者・智者」の意味。ここではそれを「無」で否定しているので、それらが関係ないということ。

③ 「未嘗～」は「いまダかつテ～ず」と読み、「今まで一度も～ない」という意味。「左右」は重要単語で「側近」という意味があるが、ここでは「母親が年老いて病気がちだ」という文脈上、「左右」➡「そば・かたわら」の意味。

④ 「未嘗不～」は「いまダかつテ～ずンバアラず」と読み、「今まで一度も～しなかったことはない・いつも必ず～する」という意味。「束帯す」は、「ず」に接続するので未然形「束帯せ」に活用させる。「～ずんばあらず」の読みに気を付ける。「今まで一度も正装しなかったことはない・いつも必ず正装する」という意味。

〈解答〉

① ともに　② 年少の者も年配の者も、愚者も智者も関係なく、

③ いまだかつてさゆうをはなれず。

〈現代語訳〉　今まで一度も（病気がちな母の）そばを離れたことはない。

④ 未だ嘗て束帯せずんばあらず

復習問題解答解説　第十講

〔解説〕

① 押韻の問題。七言詩なので、初句と二句目の句末「端（ｔａｎ）」と「肝（ｋａｎ）」から、「ａｎ」の音になるものを選ぶ。よって、エの「干（ｋａｎ）」が正解。

② 文中の「焉」は、「いづクニカ（どこ）」か「いづクンゾ（どうして）」と読み、疑問か反語。「国が亡びないことがある」というのは、まず常識的に考えられないことなので（世のものはすべて「無常」）、反語と判断する。「国は必ず亡びる」という結論なので、その国が「どこか」と場所を尋ねているのではないから「いづクンゾ」で読み、「どうして国が亡びないことがあろうか、いや、必ず亡びる」という訳になる。読みとしては「無」の直前は体言か連体形。反語であるから「乎」は「～（未然形＋ン）や」となり、「得」を未然形の「え」と読む。すべて繋げると、「くにいづくんぞほろぶる（こと）なきをえんや。」となる。

③ 杜甫は盛唐の時代に活躍した詩人。李白、王維、孟浩然が同時代。白居易、韓愈は中唐。蘇軾は宋の時代の詩人である。

④ 杜甫＝詩聖、李白＝詩仙、王維＝詩仏とよばれたことを押さえておくこと。特に、杜甫と李白。

⑤ 古体詩は唐以前の詩。唐以降に作られたのは近体詩。よって、Ａはイが正解。白居易の代表作品は『長恨歌』と『白氏文集』。よって、Ｂはエが正解。王維と杜甫は盛唐に活躍した詩人。よって、Ｃはキが正解。

〔解答〕

① エ

② くにいづ〔ず〕くんぞほろぶる（こと）なきをえんや。

〔現代語訳〕どうして国が亡びないことがあろうか、いや、亡びる。

③ エ　④ 詩仙　⑤ Ａ＝イ　Ｂ＝エ　Ｃ＝キ

復習問題解答解説　第十一講

〔解説〕

① 訓点が付いているので、書き下し文は確実にできるはず。文末の「〜何也。」は、「〜（ハ）なんゾや」と読み、「〜はどうしてなのか」という疑問の意味。

② 「但〜耳」は、「ただ〜のみ」と読み、「ただ〜だけだ」という限定の意味。「教」は、ここでは主語が人間ではないので「おしフ」という動詞ではなく、使役の助動詞「しム」と判断する。使役の対象の「子孫」には「ヲシテ」の送り仮名を付ける。「のみ」は体言か連体形接続。よって、ここでは「〜しむるのみ」となる。「ただ子孫を怠惰にさせるだけだ」ということ。

③ 「豈肯〜哉」は、「あニあヘテ〜ンや」と読み、「どうして進んで〜しようか。いや、〜しない」と訳す反語。

④ 文学史が必要な人は、本講座補足ページで学習した作品と作者は押さえておくこと。

〔解答〕

① せんせいのみひとりはいせざるは、なんぞやと。
〔現代語訳〕　先生だけお礼の拝礼をしないのはどうしてか、と。

② 但だ子孫をして怠惰ならしむるのみ

③ どうして進んで権力や勢力のあるものに付こうとするだろうか、いや、そんなことはしない。

④ 文選

復習問題解答解説　第十二講

〔解説〕

① 「為人」は、「ひとトなリ」と読み、「人柄」の意味。重要単語で、読みも意味も両方大事。アの「性格（＝人柄）」が正解。

② 「何為」の「為」に返り点が付いていなければ、「なんすレゾ」と読み、「どうして」という意味（訳）で疑問か反語。ちなみに、「何為者」なら「なんすルものゾ」と読み、「何者か」の意味。

③ 「猶」に返り点が付いていないため、ここでは再読文字ではなく、副詞で「なホ」と読む。「未」が再読文字で「未（いま）だ～ず」。「未尽」は部分否定であるから、「尽」の読みは「尽（ことごと）く**は**」である。すべて繋げると解答のとおり。

④ 司馬光は『資治通鑑』の作者であるが、唐宋八大家ではない。この問題のように、「唐宋八大家」ではない人物を選択肢から選ばせる問題がよく出題されるので、文学史が必要な人は八人きちんと押さえておくこと。

〔解答〕

① ア　② どうして　③ 猶ほ未だ尽くは除かれず。　④ カ